
神への一ヶ月～俺の周りはくるってやがる～

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神への一ヶ月〜俺の周りにはくるってやがる〜

【Nコード】

N8080J

【作者名】

21144444

【あらすじ】

腐りきった神の世界に、半神半人である神の子は、家族のために剣と知をとり、神の世界に革命を起こす。その物語の序章。ふざけた物語から、主人公はさらに強くなっていく。

プロローグ（前書き）

正直に言おう、俺に文才はない。

学校に提出するものだとしても、読み返してみても何が書きたかったのかわからない。

でも、まあよんでやるかという感じで呼んでくれた人、あなたは最高だ。

プロローグ

神の世界の統治者『統一神フィート』と呼ばれる男が、泉の前にたっていた。

後ろには初老の男性が居る。その手の中には赤ん坊が抱かれていた。

「では・・・いいんですね？」

そういつて初老の男性が、半分困惑、半分混乱といった状態でフィートをみる。

「いいんだ。」

そういった男の声には、初老の男性へ、そして自らへといった感じのようであり、そこには悲しみがあつた。

「本当に、人間界へと落とすんですね？」

「ああ、きめた、こいつは革命者になつてもらう、この神の世界は腐りきっている、だからその腐った部分を完全にとっばらうためにも、俺の息子ににんげんの世界をみてもらう。」

この世界は神の世界である。この世界の社会システムは、単純明快で、『不変の権力』というものである。能力など関係なく、ただその権力は息子へと通じていき、そしてその息子も、自分の子へと渡していく、そんな社会システム。

たしかに、怠惰や、失敗等には罰が与えられるが、たとえ功績を得

たとしても、なにかがかわるわけでもない。

いわば、課長が功績を納めて部長になったり、失敗してクビになることはないシステム。

このシステムは、はっきりいえばうらやましいように聞こえるであろう、だが、このシステムはとてつもない欠点を抱えている。

それは、『努力』というものをわすれるのである。努力して何かをなしとげようという心が失われる。

それにより、この神の世界は『ある程度やればいい』といった状態である。

ただ、怠惰がある状態。

このシステムに、危険を察知したのが『フィート』、現在の神の統治者。

不変の権利は人を腐らせる、ならば不変ではなく、変化させることが必要。だがどうすればいい・・・と考えたときである。フィートがみたのは、地球という星にいる生物すべてである。

『努力して上へのし上がる』そのシステムが完全にできたこの星に、フィートは期待を胸に、こう宣言した。

「我が子供をこの世界へと落とし、そして神にしよう、そうすればこの世界のシステムと、この世界のシステムによる世界の状態を感じ、変えてくれるだろう」

そう高らかにいった。

そして今、人間界の地球と言う星の環境がよさそうな国の中、『日本』へと、泉の能力でつなげて我が子供を落とそうとしているのであった。

落とそうとしているとき、フィートは少しばかりの後悔を胸に感じた。

『本当に大丈夫なのだろうか。』という思い。

『いまならやめられるぞ』という悪魔の囁き

だが、フィートはそれを振り払う。この神の世界がすきだからこそ、わが子を思うからこそ。

涙に後悔をのせて、体の外へと流す。

すでに顔がぐしゃぐしゃになり、涙でベトベトである。
その光景をみて、初老の男性は思う。

ああ、これが親なんだと

自らの親は、義務で自分を育ててきた。

そして神の仕事がある程度やれる程度に育て、それ以外はほったらかしであった。

だからこそ、この状況をみて初老の男性、いや『真実の神』アルドはうらやましかった。

泣いてくれる親がいるのだと・・・

そしてフィートは泉へと子供を落とす。

そして呼びかけるのだ。

「立派にいきれよ」

たくさんの言葉を

「まがりくねってもいいから、まっすぐに生きろ」

思いをこめて

「死なないでくれよ。」

アルドはその光景をみて、涙を堪えている。

そして最後の言葉・・・

「どうせならハーレムつくってこい」

アルドの涙は完全にとまった。

そして身を翻し帰ろうとするフィートに慌てていう。

「ちょ、まってください！ハーレムってなにをいつているんですか
統一神様！」

「おかしなことをいったか？」

「いや、おかしいですよ！？なんですかその、なにいつてるんだ俺
は普通なことをいつているぞ的な顔は！？口元がにやけてますよ！
？」

「見間違えじゃないかね？」

「しらばっくれても無駄ですよ！？」

アルドは突っ込みまくるが、フィートはにやけた顔を隠そうともし
ないで

「静かにしたまえ、私は感傷にひたっているのだ。」

その言葉にアルドはさらに突っ込みを続ける

「あんなことをいつておいてどの口が感傷を語るんですか！？」

再度突っ込みもうとするが、フィートはすでに歩き出している。

「まあ、俺の息子だし、大丈夫だろう。元気にいきってくれる・・・
がんばれよ、『リリース』・・・男なのに女っぽいなまえになったも
のだ。」

「統一神様がつけたんでしょう！？」

そんなこんなで、神は息子を人間界へと落とす。

そして、16となるとき、彼は知らされる。

自分が『神という存在』だと。

知らせるために天使を呼んだとき、神はいった。

満面の笑みで、「ああ・・・彼の平和を壊してしまうんですね」と。

アルドはそれを見てあきれて物もいえなかったという。

プロローグ（後書き）

さて・・・始まるんですけどね
・・・きつついなくこの作業。
でも頑張っというと思います。

第一話で速攻明かされますからね。

第一話『俺の周りはこちらから狂う。』（前書き）

ストーリー展開は考えてはおりますが、はつきりいっちゃえば適当な性分なのでまともにすすむかどうかはわかりませんね。

第一話『俺の周りはこちらから狂う。』

貴方は信じるだろうか。

神という存在を。

俺は・・・いてもいなくてもいいって感じた。

固執も依存もしない。

ただあるだけでいいと思っている。

神を俺はその程度にしか思っていない。

俺の夢は、とにかく平凡がいいから。

小学生の夢、先生。

中学生の夢、学者

高校になってできた夢、平凡な日常。

俺の夢は何処を通っても、スリリングにはいきつかなそうなものばかりである

俺は、大学を出て、就職して、そして・・・結婚して。

そんな日々が欲しいとおもっていた。

だけど、其れを望むものに、世界は平凡を渡さなかった。

何故そんなことをいつているのか？それは数分後でわかる。

今は走っている、何故走っているのが今は大事だ。

さて、時は数分前にさかのぼろう、俺には幼馴染がいる。百合子という名前だ。

その幼馴染とわかれたあと、すこし薄暗くなってきた道があるいていたんだ。

そうすると、突然空から舞い降りたのは・・・天使である。

俺の目の前に現実にこれほどまでの美しさをもったいただろうかと
言いたくなるくらい美しい女性が現れた

それは、いいんだ。別に、美しいっていうのは常識の範疇だ。

これほど綺麗な人でもいるものだといえる。

だが、俺が言うべきなのはそこではないんだよ。

翼がはえていた、完結にいうところなる。

そもそも上から舞い降りたこと事態おかしい。

なんだ、この現実的という言葉が無視した人は!?

いや、まて、別のことを考えるんだ。コスプレ・・・うん、コスプレ。

よし、さあそこから考え出してこの女性に言うべき言葉はあるだろうか!

導き出せよ俺の頭脳!

「こんにちは、次期神様。」

・・・うん、ごめん、脳が思考を停止してたよ。

何か言う前にいわれちゃった。アハハ。

ってそんなこといている場合じゃないぞ!?

この人はくるっているのでしょうか?

いや、まて、他の人にいつているんだ! きっとそうだ! そうであれ! あれつつってんだろ!?

俺は、周りを見回すが、誰もいない。

あるえ、うん、えーっと・・・。

俺は、俺を人差し指でさしながら、女性をみる。

まぎれもなかった。女性は俺をみていた。

再度思考を回転させて考える、俺はどうすればいい！

よっし！選択肢が結構できた！

・俺？

・神？

・神様って俺のこと？

・なんのコスプレ？

・ここは会場ではありませんよ

アハハ、まともな選択肢がねえや。

俺は考えた、考えてできた言葉は一つ。

「非現実はいりません！」

そんな言葉であった。

選択肢？なにそれあったっけ？

俺はそこから脱兎のごとくにげだす。

そして最初にもどるのだ。

いや、まったく意味が分からない

翼もってる時点で異常なのにいきなり神様とかありえない。

なにこの非現実的、平凡万歳、平凡万歳。

心の中で、今起こったありえない要素をふくみまくった現実から眼をそむけ、俺は自分の家へといくのである。

そして到着。

よし、追ってきてない。俺は後ろをみてそう思い、すばやく家へとはいる。

この家は『吉野家』、平々凡々な名前。俺の名前は『吉野稟』

姉、妹がいて、姉の名前は『吉野明』妹は『吉野才』

・・・名前逆だろう、普通。

姉妹は、俺にラブラブとか、どっかの漫画でありそうなことはなく、会ったら話すし・・・程度な関係。これまた普通、俺の周りには普通ばかりです。

家の扉をあけ、即座に階段をかけあがり、そして、二階の一番奥の

俺の部屋の扉へと手をかけ、駆け込む。

「平々凡々にもどったよな・・・」

そんなことをつぶやきながら、呼吸を整えようとする。

そんなときであった。

「わけがわからないな。」

「ひぐうっ!？」

いきなりの声で驚き、いきなり息を止めたせいで肺に負担がかかる

げほっげほっ・・・。

俺は、声のしたほうをみる。

そこには天使がいた。さっきいた天使だ。

「次期神様がこの程度で驚くとは、ランク付けをしてやろう、お前はカスだ。」

いつきにカス認定、意味不明である。

神様とよばれて、そしてカスと呼ばれる。

なんなんだこの光景は。

「ちょっと咲？ 神様なんだからもうちょっとやさしくしようよお！」

少しばかり幼い声がした。

声のありかをみると、以外と近くにいます。

ピンク色の髪。ツインテール。

俺の身長の胸あたりであろう大きさの少女がいた。

そしてそいつも翼がある。

俺の視線を感じてか、少女は俺にむかって手をかざす。

「やほーご機嫌麗しゅう神様ー。」

温度差がいつきに生じた気がするの俺だけだろうか。

「・・・神？」

「うん」

「はい」

二人はいう。

俺の思考はそこで強制的に停止させた。

第一話『俺の周りはこちらから狂う。』（後書き）

うん、つまんねーなこれ。

まともにくるってくるのは後々ですかねえ。

いつきに書きまくっている状況なので。

さっさと大体をかいて、あとは定期的に書こうかと思っています。

第二話『狂った家族、前編』（前書き）

うーん、まあ書いてあるから一日で15話くらいかけるけど、そのスピードでやったらすぐにネタが尽きるからやめようと思う。

ボンボンかけるよ。

あとついでにこの設定をつくったのは小学生のころ。

漫画が好きで、こんな漫画おもしろそうじゃないかな？とか思ってた。書いた。

この物語の主題は、少年が葛藤と共に成長して、乗り越えていく、そんな物語・・・が最初のころのもの。
いまやそんなものはないのですけどね。

第二話『狂った家族、前編』

翼の生えた二人組は俺にいます。

「貴方は神です。」

「・・・へえあ。」

微妙な驚きの声が発せられる。

意味不明、理解を拒絶している脳が居る。

そんな時、階段をあがってくる音がする。

ドッドッドッド。すこしはやめって感じである。

救いだと思った。

『でも今更考えると頭がとちくるってた』b y主人公。

「稟くどうしたんだ？」

そんなこんなで、姉である、『吉野明』がやってくる。

俺がいきなり階段をかけあがったのが気がかりだったのだろう、いい姉だ。

一体全体、なんで俺は稟なのに、姉は明なんだろう、としつこくい

ってみる。

正直、反対の方が良い気がする。

と、そんなことを考えている場合ではない。

はっきり言おう、絶体絶命。

部屋には天使がいます。
うそかどうかはあなたしだい

普通の人が最初に見たらどう思うでしょうか……。結論は速攻です。

天使コス。

俺の夜からの家族の目が怖いんだけど。

ヤバイ、思考停止していた。

すでに部屋の目の前にきているよ姉!?

「ちよ、くんn。」

ガチャリ。

「稟？　どうして……マニアックだね。」

ザク
ウツ

稟の精神に20ダメージ！勘違いによりダメージ付与！合計1325ダメージ！

稟は死んだ！稟は再起動を行った！稟は言い訳をつかった！

これは
・
・
・

[illegible]

まで、いまいったのは誰だ、俺か、俺なのか？ いや違う、俺の人格が二つあるんだ、俺じゃない。

「いや……俺の趣味じゃないのです、はい。」

言い訳を放つ。

「い……いや否定はしないよ?。」

ダメだ、こいつ……話をきいてくれない。

「いや、だからこいつらが勝手にきたっていうか。」

「大丈夫、ゴスロリきて、貴方が運命の人なの、とかいうやつはい

るから。」

話をきけええええつ。

「でも、自重はしような!」

さわやかにいうなよ!というか天使も黙るなよ!。

「いや・・・俺はなんていうか・・・神様なんだと。」

「・・・は?」

「いや・・・こいつらがいうので、俺は神だと。」

沈黙が訪れたし。

そして再起動。

「あ・・・あーキミは、父さんが拾ってきた訳よ。」

いきなり俺の過去カミングアウト、しかもすげえ暗い過去だなおい。

「で・・・まあ、うん、それで昔は、夢見てたわけよ、彼は神様
ってね・・・まあいまとなってはどうかでもいいかんじだけど・・・
あっちゃー。」

あっちゃーってなんだ、後悔か!?

「まあ、父さんと母さん、あと妹が帰ってきたらな・・・。」

そういえば、両親が今日かえってくるらしいのである。

両親は考古学者で、一ヶ月に一度かえってくるかどうか程度しか家に帰ってこない。

姉に追求をしてみたいところではあるが、両親のほうがいいだろう、と俺は思いました。

そして数時間後、両親がかえってきて、奇妙な呪いがありそうな仮面を手渡される。うん、あとで燃やそう。

そして食事となる。

俺の家は大抵俺が飯を作る決まりである。

何故かって？俺が一番上手いから。

さて、昔話だ、母さんの鍋の話だ。

中身を教えようか。

- ・ザリガニ
- ・タワシ
- ・輪ゴム
- ・なんかしらないけど緑色の紐っぽいもの
- ・黒光りするもの（現実逃避
- ・そして・・・粘土

なんで？なんでそんなのいれたの？

そして姉の話。味噌汁をつくらせ・・・

固体ができあがった。

・・・突然変異が起こったのだろうか、何をいれたんだろう、聞きたいけど聞きたくない。

わかっただろう、この家族の飯はとんでもなくまずいというか人の食うものではないというか。

妹はまだマシで、喰えるほどではある。

だけど他は、食い物じゃない。

車のタイヤくったほうがましレベル。

故に俺がやっている。

そして食卓には今、天使が居る、現実的なんて無視だ、このさい。

なんだろう滑稽としか言葉がうまれなかった

「・・・こんにちは、天使の、咲といいます。」

「瑠璃でーっす。」

俺は味噌汁を入れながら思ってたんだ。

今頃食卓では温度差がうずまいてるだろうと、言葉は悪いが期待してたんだ。

で、いざいってみると

姉妹沈黙

うん、そりゃあね・・・アハハ

両親談笑

・・・アゝッハッハ！ウワッハッハ！ヒーハッハッハ！

「ヴェッフェイ！？」

奇妙な叫びをだしてしまった。

そんな俺を尻目に、両親&天使は喋ってやがる。

「へえ、本当に天使？」

「はい、天使です。」

「かわいいわねー。」

「ありがとうございますー。」

そんな会話。

吉野家は平凡とかいった気がするが、両親は別物である

我が親ながらすばらしく変人である。

俺は変な汗をかきながら、席に座り、父さんと母さんをみる。

「なあ、父さん。」

父さんは会話をやめて俺をみる。

「俺って拾い子ってまじか？」

妹が飲んでた茶を吹き出した。

第二話『狂った家族、前編』（後書き）

区切るのがきつい。

文字数はあまり増やさないほうが言いとおもい減らしているけど

だんだんとくるってくると思うってください。

これがレベル0・1くらいです。

何話かしたら主人公紹介とかすればいいかな？

第三話『狂った家族 後編』（前書き）

この物語ははっきりいえば俺が好き勝手書いているだけです。
感想を書いてくれればさいわいです。

それがおかしいところの指摘ならもっとうれしいです。

第三話『狂った家族 後編』

「俺って拾い子ってまじか？」

妹が飲んでた茶を吹き出した。よかった、こいつは知らないようだ。

「けへえ・・・な、なななななに？」

妹がめずらしくテンパる。以外とクールなのに。

もう一度いうけど、妹の名前は『吉野才』なんだ、なんでだよお！
なんで俺の名前は稟なんだよ。

稟としてもねえよ！

そして親の反応をみよう。

「うん、そだね。」

簡単にいいやがった。

「いったじゃないか、お前は天からの授かりものだって」

あーきいたねえ・・・うんうん。

いや、言い回し勘違いするから。

「普通の人とはさ、それは生まれてきてありがたうって意味だと思うんだよ・・・。」

このバカ親父はずれにずれている。父さんをみると、ああ〜みたいな顔をしている

「ああ、うん、ありがとう。」

とってつけていいやがったこいつ。

やれやれを息をはいて、天使にもみそ汁をだす。

「私たちにもだしてくれるのですか？」

天使はそんなことをいつてくる。

「はぁ・・・食わなくてもいきていけるってんならいいけどさ。」

「いえ、なんていうか、私は不審がられるとおもっていたのですが。」

「不審であっても食わねばいきられぬなら食わせるんだよ、俺は。」

そういつて俺は俺の席に着く。

俺もアブノーマルのようだ。妙に落ち着く。

「カスから脱出しましたね、今貴方はダニです。」

そっちのほうがひどいような気がする。

「・・・まあいいや。」

俺はすぐに精神を立て直し、飯を食おうと思う。

「じゃーいただきますだな」

「ああ、食おうか。」

「久しぶりね、稟のご飯は」

実をいうと、俺の親は結構多忙だ。考古学者を両方ともやっていて、たまに大学に講義したりするほどの人だ。

だから、家でのんびりするのとは、一ヶ月に一度、下手をすると一年に一度あるかないかのときもある。

今回はジャストにこうなったが、・・・良かったと思う。

「さて、いただきm ガッシャアアアンツ・・・？」

みると、姉妹が同時に机を叩いて立ち上がっているのです。

「行儀が悪いわよ。」

母が注意する。

「あ、ごめんなさい。」

姉が謝り・・・そして姉妹は同時に息を吸う。

「「って、今の状況を不思議がれよ！」」

ごもつともだと思う。

だが、両親は淡泊だ。

「いやはや・・・考古学者はね、現実にていない、常識外というところを探求する職業なんだよ、だからこそ、驚いてはだめなのだよ。」

いや、格好いいことをいつているつもりだろうが、今の状況下と、考古学について結びつけれるのがすごいと思う。

なんだ？ピラミッドパワーⅡ天使か？

「まあ、ごもつともだがな。」

俺がいうと、姉妹共々俺をキツと睨む。おお、怖い。

「「あんたが騒動の中心でしょうが!!」」

ごもつとも。俺は黙ろうと思う。

「というか、説明ぐらいしてほしいわ。」

「たしかに、いきなり神とかいわれてもわけわからないのよ。」

明と才、姉妹コンビである。

まあ、俺は後でも良いとおもっていたが、聞けることにはいいことだ。

「・・・飯食べながらでいいか？」

俺がそういうと、俺を睨む姉妹であつたが、頷く。

俺は言う。

「いただきます。」

そういつて夕飯が始まる。

一口食った天使は、俺をじっと見据える。

「あなたは、ダニではありませんでした。」

「へえ、じゃあなんだ？」

「ハエです。」

「扱いひどいよな!？」

なんかカスのほうがいいような気がしてくるよ!？

「咲くおいしいってちゃんと言おうよ!」

「・・・1億、いや1兆でしょうか、それぐらいゆずってみましょう。ハエではありません。貴方は燕でいいでしょう。」

燕、なぜ人にいけないのだろう俺は。

「やれやれ」

体格では咲と呼ばれた天使のほうがうえだが、精神上では瑠璃と呼ばれた天使のほうが上である。

「あ！神様。」

そういわれて俺は瑠璃をみる。

「ん、なんだ？」

「私のことは瑠璃でいいから！」

「うん、わかったぞ瑠璃、あと天使。」

「なんて露骨なのですか、やれやれ、わかりました私も咲で妥協しましょう。」

なんというか、やりやすい人なんだと思った。

「まあ、とりあえず本題ですが、お父上、燕はどこで拾いましたか？」

・・・わかってなければ、動物保護した家族である。

「ああ、空からふってきた。」

ぶっほおおっ（姉妹のみそ汁をふく音）。

「けほっけほ・・・空からフッテキタあ！？」

「いやいやいや、私捨て子はしってたけど、空？天！？エエエエ！？」

姉妹が混乱する、当然である。そもそも空からふってきた子供を預かるうとすること自体あり得ない。

「そのときは百合子ちゃんもいっしょだったんだよ。」

『弓野 百合子』 同い年の幼なじみ、わかることは拾われていたときは、1才とかじゃないってことだ。

ついでに、弓野家とは、俺の父親と、百合子の父親が幼なじみであるから、結構関係が深い。

「んで、空からふってきた。」

OK、現実的紹介による現実構築がいつきにぶちこわされたよ。

「で、ああこいつ俺の子供にしようと思って、つれてきた。」

・
・
・

・
・
・
・
・
・

「・・・・・・・・俺は犬かなんかつ！！？」

爆発した。

主に俺が。

「・・・なんていうか、神様パワーのせいで、つれていかなきゃダメな気分になった。」

ほう、それなら許せ・・・

「そんなパワーつかってないですが。」

ねえよバカ野郎！

「・・・はあ、まあいい。」

諦めることにする。

むしろ諦めなきや駄目な気がする。

「それで、教えてくれ、咲、瑠璃・・・。」

咲はこくりと頷いた。

「なぜフツテキタかというと、りっぱな神様となると、やはりみる対象を理解させようとおもったからです。」

まあそれはわかる。

「まあそれは建前で、とりあえずおもしろそうだからやってみたのです。」

酷い！！俺の扱いが酷い！！！！

「ついでにやったのは貴方のお父さんです」

うおおおおお！殺す！神になったらまっさきに殺す！

「まあ神にならせようって統一神様がいいだし、そしてここにきたのですが、次の誕生日に神様になれということ。」

って、一ヶ月後かよ！？、つうか命令形って！？俺の立場ってなに！？

「で、私たちが伝令ですね。あとお目付役。」

ああ、つまりあと一ヶ月を楽しませようとする本当の親父の粹な計らい。

「といっても私たちは、ごはんも掃除も洗濯もできないから寝てるだけなんです。」

親父・・・そんなに俺が嫌いか・・・。

「ついでに暇だったらおちよくれって言ってました、ガンガンストレスをためさせろとも」

うわぁ・・・神になったら絶対に殴ろうと誓おう。

「で、まあ、はい、きました。」

終わりました、はい、終わり。

うん、俺は強制的に一ヶ月後に神にされて、こいつらの生活も面倒

みて、終わるんですかはいはい。

「俺が・・・妙に理不尽な気がする・・・っ。」

なんだろう、泣けてくる。

「まあそれはいいとして。」

「神様ってところが信じられないわよね。」

姉妹すら俺の味方はいなかったよ。

そして数十分討論したあと、ご飯終了。

そして俺は風呂へはいり、自分の部屋でいじけることとする。

「俺の人生何だったんだ。」

主に俺の人生についてかんがえた。

第三話『狂った家族 後編』（後書き）

・・・大体整理して、だいたい文章はそのままです。

次くらいは書いてみようかと思っています

第四話『父と息子』（前書き）

よっしゃー！もうちょつとまともにかくぞ！
感動ものだ！感動ものをかこう！
いやっふー！書くぜ書くぜ！書きまくるぜ！
うおおおおお！！

第四話『父と息子』

思ってしまった、思っではいけないことを

あれからすこし考えていて、ふと考えた。

その言葉を俺は無理矢理打ち消したが、きえることはなかった

ただ、思った。

「俺は・・・本当にこの家族の中にいてよかったのだろうか」

と。

俺は、そう思ってしまうと、この考えを捨てきれずにいる。

俺はバカだ

とてつもないバカだ。

そうわかつちゃあいるんだ。

でも、思うんだよ。

俺は、本当にここにいていいのか

考えてしまうとたくさん俺の心に重圧をあたえてくる。

苦しい、頭に布団をかぶってみても、眠れなかった。

俺はリビングへと向かう。

向かってみると、両親が居る。

帰ってきているとき、こんな時間まで起きているのか、と初めて知った。

両親は何かをみていた。

それは、俺たちのアルバムだった。

それを一枚一枚みている。

それをみて、俺は耐え切れなかった。

すぐに、リビングの父さんの前へいき、俺はいうのである。

いってはいけない言葉を

「俺は・・・ここにいてよかったのか。本当に、俺はここにいて・・・」

そういつてしまった。両親を見ようとした瞬間に、俺は意識が飛びかける。

そして豪快にふっとんで俺は壁へとぶつかる。

「なにをいつている」

俺は、殴られたのか。

「お前がここにいてもよかったか、だと？何故そう思う」

俺は、言った。

「俺は、神とかいつて父さんになにもできずにいなくなるじゃないか！勝手に落ちてきて、それで父さんにひろってくれて、楽しくて、楽しくて、楽しくて！でも、でもさあ！思うんだ！俺がいなかったほうが楽しかったかもしれないって！俺がいなくなったほうがよかったかもしれないって！姉も、妹も、平和にくらしてたほうがいいと思うだろ！？」

父さんは、手をにぎりしめながらいう。その顔はいつものヘラヘラ

した顔ではなく、厳しい顔。

「お前はバカだ、本当にバカだ、俺はお前がいないうがいいなんて思ったときなどない、いなくなったとしてもお前がいなくてよかったと思うときなど片時もないだろうといえる。お前は、俺のことを侮辱している、小学生のころ、クラスみんなで集まって、踊るっていう行事があったよな？運動会、いっしょにはしったよな？お前の中学入学式、でっかくなったと思った。高校になって、ああもうすぐ独立かと寂しくなったりもした。俺は、そのとき嫌そうだったか？」

俺は、首を横に振る。

「うれしかったんだよ、寂しかろうが、疲れようが、仕事をがんばって終わらせてつかれきった体を無理矢理動かしていても、お前といっしょにすることが、だから笑顔だったんだ。・・・お前は俺のうれしいって気持ちを否定したんだ。わかるか？」

俺は、涙が頬を伝うのを感じていた。

俺は、バカなことだとは思っていたけれど、今、一番後悔した。

本当に俺はバカだ。

ああ、俺の両親は最高の両親だ。

「うん、じゃあ、一ヶ月、満喫するよ。」

そういつて出てこようとする、呼び止められる

「だが、飯をつくらないことだけは許さん。」

・
・
・

・
・
・
あれ？

あれれ、ちょっとおかしいなあ、今の言葉、良く聞こえなかったぞ？

「ついでに、神になったら古代遺跡とかバンバンみつけさせてくれ、運MAXって感じで。」

・
・
・

そういつて寢室へといく両親

・
・
・

・
・
・
・
・
・
アッハッハ！

「アッハッハッハ！」

感動しちゃったよ俺！

俺はなにをしていたんだろうか！

「この糞親父iiiiiii!」

罵倒の知る範囲での言葉をさっていく父親にぶつける。

泣きながら

寝室にはいつて、稟の父親、『大地』は泣いた。

それを聞いていた咲が思ったのだ。

ああ、血がつながろうと、血がつながっていなかろうと、父親というものは似るのですね、と。

彼の父親、統一神も、彼を送り届けたあと、ひとりでに泣いていたそうである。

第四話『父と息子』（後書き）

うん、俺に才能なんてものはない。
泣けねえ上につまんねーや。

調子乗りました、ごめんなさい。

もうちょっとどうすればいいのだろう？

10分で書くんじゃないめなのかな？

もうちょっと時間をかけて書いてみようかと思っています

第五話 とりあえず設定でも書こうかと 一神編一（前書き）

はつきりいてみると。

これみなくてもいいんだよね

第五話 とりあえず設定でも書こうかと 一神編一

次の日である。

俺は朝食をつくり終え、時計をみると結構みんながおきてくるまで時間がある。

俺はテレビをみている天使をみて、いった。

「咲、瑠璃。神について、教えてくれ」

天使はこちらをむき、うなづく。

さて、とりあえず・・・書こうか・・・きめちゃったからな・・・。

【神の世界】

名前なし、生きているのは神のみ。

人間の魂等はこちらには存在しない。人間でいう、天国と地獄というところにある。

天国と地獄の存在理由は、治安の安定であり、それ以外はない。

ついでに動物の魂も人間と同じところにある。

【神】

決定的なものは、『神のすべてが全知全能にあらず』ということ。

『全能』だが、『全知』ではない。理由は『知恵の神』の存在理由がなくなるから。

主人公、稟も全能ではあるが、全知ではない。

「魔術などのたぐいはできるか。」という質問をすると、返す言葉は一つ

「あなたはそのつかいかたを完璧にわかっているか。」

完全に理解し、実行するならば可能ということになるだろうが、魔術など、想像上での産物は、やれるものがない、故にやりかたがわからず、それによって使用不可能となる。

『知れば出来るが、知らなければ出来ない。』それがこの世界でいう神

【神のシステム】

最初のプロローグにて行ったとおりに、神のシステムは『不変の権力』

ははっきりいえば『権力≡知恵』としてりかいしてほしい。

『知恵の神』は、事実なんでもできるのではないか？といった考えが浮かぶ人もいるだろうが。

根本的に違う。

『知恵の神』は『真実の神』になれるであろうか？

答えはNo。

理由は『知恵≠真実』

知恵とは、存在するものをそのまま知ることであり

真実は、そのものの存在理由、何故存在しているかどうやって存在しているか、世界に存在するにあたってこの存在はどうやって存在しているか、誰がどうやって、このような形で存在するか。つまり存在の『存在する経緯・存在方法』をしろ。

そういった根本的な違いが起きるので、神は他の神にはならない。

つまり、権力をあげるにしても、『知恵は固有の権力』として存在しているために、代返不可能なため『不変の権力』が存在する

そしてできてしまった『不変の権力』のシステム

知恵は固有であり、誰が功績をあげようと、『そのものの功績の大きさ』というものを理解できないため

功績自体が消去されている

例をあげると・・・なんていうか、ガリレオの地動説みたいなものだよ

信じられなかったのではなく、信じられなかったって感じ。

パソコンしらないやつが、超ハイテクパソコンをつくったヤツ、っていわれて、すごいと思うか、ってことだ。

ついでに、戦争は神の世界ではないよ。

神が神を殺すと、知識の受け継ぎができなくなっちゃうから。

知識⇨権力なので、権力の移り変わりは知識を受け継がせることになるわけ

で、知識の受け継ぎなしに、戦争をおこして、神を殺すと、たちまち世界バランスが崩壊して

多数の異次元崩壊のうえ、神の世界の維持も不可能となってそのまま全員死亡する。

ついでに、受け継がせて監禁って選択もあるかもしれないけれど、それは統一神が許さないから。

統一神は、言ったとおりに統一した神であり、いつでもすべてを見

ている状況なんだよね。

どっちにしろそんなことをやったらバレル

といった感じ・・・

めんどくせえ・・・

めんどくせえけど結構ありきたりなところが多いから後々補足しなきゃだよ・・・。

第五話 とりあえず設定でも書こうかと 一神編一（後書き）

めんどくせえええええ！

しかもヤケクソだからな！この紹介。

おかしいところあったらいつてください・・・

第六話 I N 学校。幼馴染は

「ぐっふおおお!？」

幼馴染は・・・女子ボクシング部、チャンピオン。

遠心力をつけた超強力☆な技を今はなった人だよ。

俺は回転し、そのまま地面へと叩きつけられる。

そのまま俺は暗い暗い世界へと旅立つ・・・。

「逃がさない。」

幼馴染は・・・俺を強制稼働させる・・・

タ・・・ス・・・ケ・・・・・・テ

さて、時は今朝までさかのぼる

飯も作り終え、神について天使に聞いた後である。

飯を書き込み、咲は俺をみながら。「ああ、まだ人になりませんね。」と朝食を食べていていた。

自分でつくった飯を一ヶ月後ここをいなくなる俺がもそそと鬼畜家族と共にくってやっていると畜生なんだよこのやろう

俺の待遇はゴミかカスかとちょっとしょっぱい朝食を食べ終わり、学校へ向かおうとすると、母が一枚の封筒を渡してくる。

「なんだ？これ。」

そういうと母は、愚かなものをみる眼でみてくる、・・・・本当にまったく畜生な人たちだぜ

「透視ぐらいできないの？」

なんて無理難題を言うのかな、君は。

「神は全能だけど全知じゃないから。」

「ならできるようになればいいじゃない。」

できるようになる術がないんだよ。なんだよそのパンがなければケーキ思考、どっちとも根本が間違ってるやがる

「まあいいわ、とりあえず退学届け。一ヶ月くらいは、朝昼晩の飯

作り以外はのんびりしなさいってことよ。」

母は心底あきれた（本当にこいつは母なのか？）ようにそう言い渡すと、今日にでも仕事場に向かうのだろう、

母は飛行機のチケットを俺に見せる。

「いってらっしゃい。」

いつものように俺は言う。

「うん、いってきます。」

母は自分の部屋へと戻っていった。

いやあ・・・

そんなことよりさ・・・

なんで、飯作りは義務みたいになっているんだろう。

涙と言う名の汗をふき取り、俺は革靴をはいて高校へと向かう。

さて、平和な学校だあつ。

俺は心の中でスキップをしながら学校への道のりを歩き始めるのである。

「ウフフフ、アハハハ」

横で「あの人どうしたの？」 「シツミちゃいけません」という声がするのが聞こえていなかった。

俺は満面の笑顔でスキップしながら「ウフフ、アハハ」といいながら登校していたのである。

学校到着。

そして俺は教室へと移動する。

神様でも高校生、二年三組という札があるところへはいり、席へとつく。

「や、稟。」

声をかけられる、表をあげると、百合子がいる。

こいつは『ボクシング部』に所属し、そして高校生チャンプの栄冠をとった

ついでに、俺はこいつと渡り合える。

殴り合いで（一方的に俺が殴られ耐える意味で）。

あと、いまさら変なスキルを言うが。

俺は他者を強める、プロデュース能力が高いらしい。

調子にのって百合子を強めた結果が、『リングを素手でつぶす美少女』が完成した

・・・俺はこの学校やめるんだ発言をこいつにいう勇氣があるか？
いや、ない。

こいつをこんなことにしちまったのは俺なんだよな・・・

「自分の才能が怖い。」

「？、なにいつてるんだ？」

不思議そうな顔をされるが、スッと顔をそらす。

「いや、はや、百合子は本当に強くなったよな。」

「うん、キミのおかげだと思う。」

「うん、ありがとう。」

おお、普通の会話である。

これならいける・・・！

「俺、学校やめるんだ」

ドオンッ。

「どういことかな？」

壁が、俺の横の壁がくだけたよ、今。

「・・・い・・・いや。」

「どういことだい？」

「なんでも・・・ありま」

「ないってことはないよね？」

「え・・・うん。」

「聞かせてくれるかな？」

「・・・はい。」

俺はよわかった。

壁が粉碎されているので、いま行動を間違えればこのように俺はこなごなになるんだと思うと怖い。

「・・・俺は天から落ちてきました。」

「ああ、知っているよ。」

たしか居たといっていたっけな。

「それで俺は神様でした！」

ドゴオンッ

「嘘はいけないな。」

いや、嘘じゃない、っつーかお前は天から来ているのみたのになんで神は信じないの!?

「嘘、じゃない。だからこそ、今日俺の家にきてくれ。」

「ほう、来てくれと? うん、行こう、これでなんでもなかったり冗談だったら、本気でキスをする。」

「覚悟する・・・っておいしいい! キスっておい!」

そこは殴るとかそういうものだろう!

「なんだ? キミはMか? 殴られた方が良いのか?」

それはない、でもキスもない。

「後悔はしないとおもう、大丈夫だ。」

ヤメテクダサイ

「なんにせよ、嘘ならそうなるってことだ、キモに免じてくれ。」

「・・・ハイ。」

そして放課後・・・

いまさらになってわかったんだよ。

俺は今全力で走っている。

なぜかわからないけど本能がつけている。

『天使をみせたら俺が死ぬ』って。

「逃げるか稟！」

後ろから百合子が走ってくるよ。誰かタスケテ。

つーかあいつ速いな〜アハハ。

追いつかれる。

俺は百合子をみようとする、目の前には・・・

拳があった。

そして最初へ

「ぐっふおおお!？」

5メートルはとんだ。

気絶しそうになると、百合子は無理矢理起き上がらせる。

「逃がさない。」

彼女の鬼が面白いことをみつけたような満面の笑みは忘れないであろう

俺はひきずられながらも自分の家へとむかうのであった。

第六話 I N 学校。幼馴染は（後書き）

主人公はハーレムですか。

Yes・・・

第七話『姉と幼馴染。』（前書き）

シネよ！書いておいて主人公死ねよ！

稟「なにいつてんだコイツ!？」

第七話『姉と幼馴染。』

そういや、退学届け。

先生の机に叩きつけてから帰ってみたけど大丈夫かな？

稟は、常識人ではある。あの中では。

しかし、あの中ということだから。

ちよっとズレている。

百合子との約束の下、俺は真実をみせるがために道に行く。

ちよっとそこ、逃げたくせにとかいたら打ち殺すよ。

とりあえず到着！

「・・・ここが、男女の名前がまったく逆な家か。」

うんうん、わかるわかる

「いや、稟、私のマネをして、不平不満をいわないでくれないか。」

うん？今なんか言ったかい？聞こえなかったZE☆

扉をあけ、ドアをあける。

「ただいま」

というと、返答

「お帰りなさい燕。」

「オカエリです。」

天使がおでむかえである。

「な・・・おい、これが・・・っておい！何その眼！？』とうとうこっち系に・・・』って顔はやめてよ！」

俺はノーマル！俺は正常！

「はい、そうです。」

「瑠璃は天使だよ！」

なんという、まあこれで・・・。

「決して、稟に、これきて俺を神とたたえよ、っていわれているわ

けじゃないよね？少々リンは他の人とちょっと違ってね、まあ両親がそうなんだから仕方ないんだが、ちょっとびっくりするほど変な部分がでてくるんだよ、変態的な「あーあー聞こえない聞こえないグフォッ!？」・・・ちよっと黙っててくれ。というわけで、そういうことじゃないよね？」

しつけないな！確かに信じられないのはわかるけどな！

腰がいたい。

「いえ、・・・なんて言えбайいのでしよう、神を神とたたえるのは普通でしようが、まあ彼は事実神なので、そういわれても無意味です。」

お前は最初俺をカスといったような気がする。しかも今は燕だ。今も神とたたえる気がない。

「・・・信じられないな、キミにはマネージメント能力が人としては異常なほどあったけどな。・・・まさか神とは。」

俺もいまさら神というところが疑わしくなってきたよ。今更だよ今更。

「まあ、信じておこう、疑わしいが、絶対に信じないと言うわけではないからな。」

信じてないのはわかったよ。

「そもそも、天から降ってきたことをうけいれてこれを受け入れないのはおかしいな。」

そもそも天から降ってきていることを受け入れている時点でおかしいよ。

「まあ、これでいいんだよな？」

「まだ信じきったわけじゃないから、ほっぺにチューだろうか。」

「なにいつてんだオマエ!？」

「・・・ああ。」

百合子に説明をしまくって、そして終了し、そしていまソファでぐったりとしている。

ちなみに百合子は帰った。今は姉さんがいる

「そんなに疲れることはないじゃないか。稟の現実だろう？」

「俺の上に負ぶさるな。ちょ、胸、胸があたっている!」

「あてているのさ。」

なんていうやつだろう、女としての恥じらいはないのだろうか。

「ほれ、ほれほれ。」

「動かすなこの野郎、怒るぞこの野郎」

「照れると言葉が陳腐になるな、稟は。」

畜生、女って卑怯だ。

だが、なんていうか、男なのでうれしい気持ちにはあ……姉だし、
ないし、うん、血はつながってないらしいけど……

くっ！俺は男さ。

「……なにをしてるんだ？」

俺の天国は地獄へといっきに転落したのであった。

「……」

「……」

二人して無言になりました。

「なにをしているんだ、燕。」

「……さあ？姉さんに聞いてよ。」

咲はコクリとうなづく。

「ちよ、まってよ、そこコクリ……じゃないよ。ちょっとまって
！」

「なにをしていたのですか？」

「え？なに？私の言葉無視？」

「なにをしていたのですか？」

「無視はいけないなあ、咲ちゃん！天使なんだから、天使の慈悲で私の言葉も・・・」

「なにをしていたのですか？」

「イチャイチャしました。」

弱い！やっぱりこの人俺の姉だっ！つかイチャイチャって！？

「つていうか、姉さん！イチャイチャって！姉と弟だよ！？」

「いいじゃないか、血はつながってないんだし。」

いや、隔たりという物があるとおもうよ！？

「なるほど、カミングアウトですか。」

「なにを！？今何をしたっていった！？」

「なにつてカミもぐう・・・なにをするんですか明さん。」

「・・・」

殺気が、目に見えるようである。

どす黒いオーラがボウボウと。まるでそれが鬼であるかのようだ・

・
「・・・なんでもありません。」

さすがの咲も空気を感じ取ったのか、なにもいわなくなる。

「・・・では、私はいきます。」

「!?!? ちょっとまって! 二人にしないで! なんか黒い! 黒いオー
ラが! こんなすきんしつぶあんまなかったけど! オー
ラあああ!」

「私が危ないのだ。」

「俺神! お前天使! 助けて!」

「なにをいつているのですかね?」

え? なにとって・・・助けてって。

「燕、あなたは次期神です。」

・・・これは。

上手く言い逃れた感じである。

いや、はや・・・。

俺は死ぬのか。

ハハ。

咲がでていく。

そして部屋には、どす黒いオーラをもった姉と、ブルブル震える弟が残ったのである。

「定位置へ。」

「・・・え？」

「元の位置へ戻れ。」

「・・・え、ちょ。」

「戻れ。」

「・・・はい。」

姉＞弟

姉＞次期神

の図が完成したのであった。

そして一時間はたっぷり洗礼をうけるのである。

主に、プロレス技で。

第八話『天使姉妹』

夜、といっても夕方ぐらい。

俺は神の定義ともいえる。『全能』であり『全知』ではないことについて考えてみる。

そもそも俺の料理の腕前事態おどろくべきことであつたことをいまさら思ってみる。

俺の家族をみて、味噌汁を固体にしたり、鍋に日用品をいれたりするやつだらけなことを考えると、驚き。

まあ、血のつながりはなきにしろ、見本もないのにここまで上達するか普通？

料理の本を見よう見真似で創り続けて、ここまで上手くなるものだろうか？

と考えたとき、思いついた。

料理は『〜がどうなるまでの過程』というものは、『自らやるのではなく』『物にやらせている』

つまり、『全能』にて、物をどうやって使うかを理解すればできるようになるのである。

「すばらしい・・・すばらしいぞはっはっは！」

これで俺は生き延びてきたんだあとしみじみ思った。

・・・ならば物になにかをやらせるという技から『全能』をうみだせばいいのではないか？

武術に関しては『やり方』を覚えれば結構できるということだ。肉体能力以上はできないし、動体視力ほどのことはできない。

気や、魔術に関してはできると思うことすら今は放棄しているが、俺、もしかして強くなれる？

そう思ってみたり。

稟はちよつと元気がでた。

夕飯もうすぐで作り終える。みんなを呼ぶ

和食から変えて中華へ。

まあ、お気に召すであろうかという具合。

家族にあわせようと思った。

・・・血はつながらないけど、いっしょにいるなら家族だって、俺に言い聞かせている。

「ほう、見慣れないな、燕。」

未だに俺のことを燕とよぶこの天使。

「へえ・・・からい臭いがするねえ。」

「まあ、中華料理だしな・・・すこし辛いイメージがあるが、結構食べやすいぞ。」

「へえーちよつと味見・・・」

手をだしてくる瑠璃を止めようとおもうが、両手はつかっている・・・つまり、止められない。

そんなとき、それをとめたのは咲であった。

「姉さん、やめてください。」

そうやって手をつかむ。瑠璃はそれを不服そうにみるが、諦めたように手をさげる。

「ありがとう咲。」

俺は咲へと礼をいう

それを咲は、当然のことです、といわんばかりに俺をみてる。

「待ったほうがおいしいのです。」

その言葉をきいて、俺は少し笑った。こいつもみんなと一緒にがいいのか、と。

「な、なにを笑っているのですか。」

「いや、かわいいな、と思ってさ。」

それを聞いて、顔を少し赤くしてソファへと身を翻し、帰っていく。

なんだ、結構かわいいじゃないか、と俺は思った。

・・・ん？

なにかツツコミどころがあったような気が・・・

なんだったつけ・・・。

まあ・・・いいか。

「さて、飯にするか。」

作り終え、席へと向かった。

そこには、姉と妹、咲が座っている。

瑠璃はテレビをみているようだ。

咲をみると、わかったように、瑠璃のほうをみる。

姉妹はすぐに食事を再開する。

「姉さん、食事ですよ。」

ブウウウツという音が盛大に響き渡る。

朝の残りの味噌汁が、盛大に空中へと舞う。

茶色い水が吐き出され。

そして俺の顔へと舞い降りるのである。

「目があっ！目がああああっ。」

朝の残りであり、中華だけどちよつと不服だなあと思っていた味噌汁の逆襲。

ム○カのように俺は目を押さえた打ち回る。

速攻走り、キッチンへと走る。

水道から水をだし、目をあらっていると、後ろが騒がしい。

「えええええっ!? 姉!? いや、うん・・・瑠璃・・・って姉ええええっ!？」

姉の驚きの声が響き渡る。

「はい、そうですけど？」

ああ、そうか、俺がツツコミどころだと思ったのは、瑠璃を咲が姉だといったことか。

あきらかに咲が大人であり、瑠璃は幼児である。

「ええ? そうだけど・・・何か変?」

「い・・・いやいや、なんていうか、瑠璃が年下だと思ってましたけど!？」

今度は妹の声だ。

「むーひどいなー私は年上だよお!」

「思い切り幼児体型ですから。」

俺は眼の痛みが消えたので、すぐに席へと戻る。

「へえ、姉妹なのか。」

とつくのとうに姉妹が驚いたので、俺は別のことを驚くことにする。
こっちも言うべきところだ。

「うん、瑠璃はお姉さんなのだあ！」

嬉しそうにする瑠璃と、それをほほえむ咲、それは完全に保護者である。

「へえ、姉妹かゝ何歳くらい違うの？」

そう聞くと、瑠璃は立ち上がる。

「私は19才！咲は14才だよ！」

咲は14体型がムッチムッチであるのか。・・・っと、思考がちよっとエロくなってしまった

その言葉に、吉野姉妹は吹き出す。

「・・・私より・・・年上。」

姉は大学一年生・・・18。

そして瑠璃は・・・19歳、みごとな年上。

妹さえもその事実には唾然としている。

「私と・・・咲さんは・・・同年・・・」

妹の視線は、完全に胸をみていた。

今夜の食卓は、とても騒然としていた。

第八話『天使姉妹』（後書き）

まだおわんネエ・・・書いてあるやつが・・・おわんネエ・・・

主人公の狂っているところを書きたいつてのに・・・つーかまだ二日目だよ・・・これ何話かけばいいんだよ・・・。

第九話『刺客だか武器だか』（前書き）

つかプロフィール書いてもいいけどさ、正直適当なんだよね

瑠璃「てめえさつさとかけや」

！？

第九話『刺客だか武器だか』

もっと夜になりましたとき

さて、寝ようかと思っていたとき、自分の部屋をノックする音がする。

さて、こんな時間に誰だろうと思い、返事をする。

「はいつでもいいけど？」

そういうと、ドアノブを掴む金属音になり、そしてドアは開く。

そこには咲と瑠璃がいて、刀をもっている。

「ハッハッハ、殺さないでください！」

「なにをいつているのですか。」

あれ？殺すわけではないのか？

「じゃ、なんでそんな刀もってんの？」

そうきくと、瑠璃が前にでる。

「氷雨っていう刀らしいよ？あと神様からこれー」

んむ・・・護身用とかいうものだろうか？

息子の身を案じるなんて親っぽいところもあるじゃねえか、でも刀はないだろ刀は。

まったく、神様の世界の常識がここで通じるとでも思っているのだろうか。

まあ、うれしいわけであるが

手紙をペラリとめくり、見る

『よっ、息子、元気にしているか？そっちのお前の父親とあってみたくもあるが、俺は神だからな、あえないんだよね・・・そこがすこし不満なところはあるけれど、俺は神をやってるんだが』

ちょっとフランクだが、まあまともだ、そうだな、神様だしな。

『つーわけで刺客送ってみた。戦っといてくれ』

「しねええええええええ！死ねええええええええ！」

期待ばかり裏切られるよ俺の親共は！

まともでもない上にうれしくもないよ！

そんなんで生き残れるの意味で戦わされても意味ないよ!?

なにがしたいのかさっぱりだよ。いや、わかるけど。思考がまったく読めない。

俺が言えることはただ一つなんだZE

死ねばいいのに

「どうしたのですかね？ 燕」

「いや・・・大丈夫、落ち着け、俺・・・」

スウー・・・ハァー・・・スウ・・・ハァー。

よし、続きを読むか

『まあ、節操なしだと近所に迷惑がかかるからな、奇襲として一人のときにしてもらったぞ?』

なにそれこわい。

なにそこだけまでも

『ああ・・・あと天使のことなんだが。』

おお、なんだ? 神から神の使いの使い方☆とかいうのか?

『手をだしまくればいいと思うよ。』

なん・・・だと・・・?

そんなものは・・・必要な・・・な・・・ないんですっ! (必死)

だから、天使たちはどうするんだよ!!

『ああ、天使は食って寝るぐらいするし、服ぐらいかってやれよ。』

いいこと全然ないね・・・。

なんだろう、とっても神様をミンチにしてやりたい気分だよ。

「畜生・・・なんでまともじゃないんだ・・・」

「威厳がありますから・・・」

「威厳関係あるの!？」

そんなこんなで刀をもらう。

といってもこんなもの持ってもな。

一人のときだからもってなきゃいけないし・・・

「ついでに神様より、『マジパネエWWWマジパネエよこの刀WWW』といったな刀がキーホルダーになるそうです。」

おお!はてしなく微妙な言葉だが、やってやる!

「マジパネエマジパネエよこの刀・・・っと。」

あれ？戻らない。

「笑い方がたりてないとだめだそうです。」

そういつて結構分厚い本のようなものをめくる咲。

「そんなものなのか・・・？」

「神様からいただいた本には書いてありますが。」

仕方ない。やるか。

「マジパネエWWWマジパネエよこの刀WWW」

あれ？戻らない。

「ああ、嘘だそうです。」

コロシテヤロウカコノヤロウ

ちなみに『ON!』と『OFF!』といえは刀になったりキーホルダーになるそうです。

「ああ。」

いまさらながらに気づいた。

でていこうとしている天使に言う。

「そういや、明日は暇？あと翼消せる？」

「できますが・・・」

「じゃあ、俺の住んでいる町を教えたいんだけど・・・あと咲と瑠璃の服も書きたいし。」

天使は二人で見合って。

「はい。」

「うんっ!!」

そういつて瑠璃は笑顔で。咲はすこしうれしそうに出て行った。

第九話『刺客だか武器だか』（後書き）

ふう・・・大体自分で書くようになってしまったし
進みがとてつもなく遅い気がするのは俺だけでしょうか

時間もかかりますし、正直ドンドコ（！？）言ってしまうおうと思えばいけるのですが。

第十話『我が人生は納豆と共にあり。』（前書き）

ふ・・・やつとギリギリプロフィールかける程度にすすんだ。

瑠璃「おせえんだよタコが、てめえこそカスだろカス。」

まあ、もとの設定、瑠璃は腹黒ロリ天使だったんですけどね。

ロリコンじゃないからね。俺は。

だからこそこの設定にしたんだから、ついでにMじゃない。

瑠璃「ああ？　つーかさっさとかけやカス、爪一枚一枚はがすぞ？」

第十話『我が人生は納豆と共にあり。』

なにごともなく次の日、三日目である。のこり今日もあわせ29かな。

延々と空手やら、柔道やらをテレビでみて、『全能』をいかそうと努力中。

魔術つかいたい、気で地球フツ飛ばしたいという危険な願望。

だが、魔術の原理について、魔力とはどうやって創られるかについて覚えるすべがないので、現状、武術をみて覚えている。

体力づくりに関しては無問題、百合子との戦い（一方的に殴られる）など、百合子とトレーニングを共に（ひきずりまわされる）により、体力はあるほうだ。

そして寝て、三時間ほどでおきてしまう。

「普通の時間におきてしまう自分が恐ろしかったりする。学校ないんだし、一ヶ月しかいれないんだからまともなあつかいがほしいと思うんだが、それは一生かなわないと今現状諦めている。

だが、俺には今日やるべきことがある。それはなににか？前の話の最後をみればわかるであろう。そう、天使の街案内。天使がやるのではなく、俺がやる。もう次期神という身などどうでもいいという結論が現れている。神っていったいなんなんだ。権力まったくねーのかコノヤロウ。」

「ふとんの中でなにをつぶやいているのですか燕」

「はう!？」

起き上がってみると、俺の隣に瑠璃、目の前に咲がいる。

・・・きかれてたのか、独り言。

うわ・・・恥ずかしい・・・。

「おはようございます。」

「おっはよー!」

そんな二人の声をきいて、気にしてない感が逆に羞恥心を引き起こす。

「お・・・おはよう。」

顔が赤いを感じながら俺は朝の挨拶をするのであった。

さてと、っとベットから抜け出し、部屋を出ようとする。

振り返り、

問う

「どんな朝ごはんがいい？」

朝ごはんっていうのは結構種類がないため、聞いたほうが簡単である。

なんでもいいという言葉は苦しめるため、思いつきでもいいからいつてやろうな、みんな

「んー漫画であつたやつ！」

漫画？普通の朝食かな？和食か洋食ぐらいしかないとと思うけどな。

わからないといった顔をしていたのであろう。瑠璃は姉の部屋から漫画をもってきている。

そこにかかれていたのは・・・

「満漢全席・・・だとお！？」

無理、っーか無理。

「これは・・・朝食と言うレベルではない。」

「でも、朝に食べているよ？」

誰だこれ書いたのは、ちょっとキュツとしてくる、主に血管を

「これは王家のみなさんがくっているのです、私めには到底できないものなのですよ。」

「王家？」

「王家とは、私と縁のない高貴な人です。」

「貴方は次期神ですが？」

おおーそうでしたねっ。

・・・あれ？

「なんで、王家に喰えるものののに神が喰えないんだろ？上というか全人類以上なのに、なんでそれより下（？）なものとは縁が無いんだ？まあいい・・・とりあえずそれは無理だ。」

「うん・・・わかった」

ちょっと残念そう、機会なんてないだろうが、いつか作ってやろう。

「とりあえず今日は和食、昨日と同じだけどすこし変えるからな！たのしみにな！」

「うん！」

元氣良く笑った瑠璃をみて、咲はうれしそうに微笑んだ。

本当にこいつらは姉妹なんでしょうか？

料理し終える、アジの開きや、なめこ汁、そしてごはんにつけもの・・・よし。

納豆とか大丈夫だろうか？まあとりあえず付け加えとこう。

「さて、ご飯だよ！餌だぞ！この犬どグハアッ！」

いつのまにか後ろにいた姉にバックドロップをくらわされ、脳がグアングアンいうが、こういうことには慣れているので立ち上がる

「ごめんなさい。」

俺は謝った。

そして全員席がつく。

「なんだろう・・・この状態がすでに常識になっちゃってきた。」

なんだか、悲しい。

「まあいいじゃない、天使コスとか言われるよりは。」

お前がいつてるだけだろうが、姉

「それはさておき、燕。」

「ん、なんだ？」

咲が納豆をさしていった。

「これは、なんですかね？」

咲、おお咲、あなたはいいいものに目をつけたようです、どんなものかという金の延べ棒10tぐらいのものをみつけたようなすばらしさ、あなたは最高です。

「納豆だ。」

「なっとう？」

「目をつけた人は最高の人間だ、生きてくれてありがとう。」

「は・・・はじまった？」

妹の才がなんかいうが、無視だ。

「・・・い、いいからおしえてくれないか？」

ちよつとカンだ、顔真っ赤、どうしてだかわからないけど続けさしてもらおう、この納豆のすばらしさは文字では表せないんだよ。

俺の好きなものNO1、神が最高といいながら一日3パックぐらいくってたこともある代物だ。

「・・・すばらしい、かき混ぜるとねうゝあねうゝあするんだぜ。」

「なんだか『ば』の部分が変な気がしますけど。」

「そんなことはどうでもいいんだぜ、これは醤油適量、辛子適量をいれて、お好みの卵や葱をいれて、ねばねば、ぐっちゃぐっちゃという

音が鳴る程度で、良い感じに白い・・・液体？糸？まあ好きにかき混ぜれば上手くなるんだぜ！？」

「やっぱりお兄ちゃんって、納豆になるとキャラ崩壊起こすよね？」

「俺のキャラってなんなんだ？、ついでにいうと、醤油は添え付けがあるぞ、ほいこれ、使え、本当に上手い、納豆に合うようにつくられてるしな、納豆というのは、かき混ぜ方により本当にうまさが違うんだよ、正直、糸に味がつくか、豆に味がつくかでも味が違う、正直な

臭いとかで意味嫌われている部分があるのだが、辛子をいれれば臭いは消えるし、はっきりいっちゃうと、辛子嫌いゝだから入れないゝ納豆マズイゝっていったら、

オマエヲモンドウムヨウデコロス。」

「凄い殺気を出したね今！？、というかお兄ちゃんのキャラは常識的なんだけどね。」

常識！？俺は常識人だろ！？

「俺は常識人、納豆クエ。」

「ま・・・まあいいけどね。うん、まだ常識的な部分は残ってるし、妙に冷静なところいいは。」

「うん、俺は冷静常識人！納豆クエ。」

「なんの脈絡もなく語尾に『納豆クエ』をつけてる！？やっぱおかしい！！」

失礼な、俺は超常識をもった、超常識人だ。

「むしろスーパー常識人3だ。」

「やっぱおかしくなってるよ！？」

「まあいいですから、とりあえず食べてみましょう、燕、初めてなので貴方にやって貰いたいのですが。」

「ああ！やるぜ！俺はとことんな！」

納豆をうけとり、俺は市販をいれ、辛子を市販にいれ、そしてもうすこし辛子を付け足す。そしてかき混ぜる。

そこにもこだわりがあるが、秘密だ。

「さあっ！出来たぜ！たべてみてくれっ！」

「なんでこんなテンションなんだ、燕は。」

「そこまで好きってことで、勘弁してくれ・・・。」

姉、勘弁しなくてもいいと思うけどな。

「まあ・・・いい、注意点はあるのか？」

俺に聞いてくる。ん、まあ納豆は色々と危ないてんがあるのさ。」

「落とすな、食べたら口の中がねばねばっとするが、それはおいしいある飲み物ですすいでくれ。」

咲は頷く。となりの瑠璃でさえも、興味津々、とでもいうようにみている。

ごくっ、と咲が唾を飲み込む、緊張しているのだろうか、かわいいやつめ。

そして、咲は納豆の一粒をとりだす。お茶の間が静まりかえる・・・あれ？なんで緊張ムード？。

そして、食べる。ゆっくりと、ゆっくりと。

「・・・！」

咲はバツと俺をみる。

「・・・おいしい。」

その瞬間、俺は歓喜した。

「あんたは最高の女性であり！最高の友だ！結婚してくださいっ！」

「な、なななななにをいつてんですか！！・・・うう、わかった。あなたはランクアップです。燕から稟と呼びましよう。」

「おお！やっと人間だ！」

「ですが、神と呼ばれるにはほど遠いです。」

いや、そこはどうでもいいのだが。

「納豆のからしはそもそも匂いを抑えるためにつかわれはじめたんだぜ！！通」

「本当に大丈夫なのか稟は。」

「もう・・・ほっというてあげて・・・」

あれ？なんであきれられているんだろうか？

「私が納豆嫌いといっただけで机をたたきわっただろう・・・。」

「あるえ？」

「うわ、お兄ちゃん絶対わかってるね。」

僕全然わかんない。

だからわかんないから責任とかない。

「じゃ、ごちそうさま〜じゃ、あとで街ね。」

「はい、稟。」

「は〜い神様〜」

そういつて立ち上がって台所へといき、皿を洗って、拭いて、棚へ
としまう。

「って逃げた!？」

「そもそも叩き割ったのって今思えば神パワーだったりするのかな・
・。」

「いえ、神にならなきゃつかえませんよ。」

「「つまりあれは通常装備!？」」

家に吉野姉妹の叫びがひびきわたった。

第十話『我が人生は納豆と共にあり。』（後書き）

ヒーハー!!

ちよつとくるってきましたあYO

ということで、おはようございますこんにちはこんばんわ。

最初にいえよって感じだけどなにそれ？僕わかんない。

ということでしたようなら。

第十一話 『設定だけなのに11話って書いて良いのかな?』 一人編一 (前書き)

さて、テスト前なのでやっぱり投稿は落ち着かせると思います

第十一話『設定だけなのに11話って書いて良いのかな？一人編』

「さて、稟、あなたたちについても教えて頂こうかと思います」

朝食を食べ終わると、そんなことをいわれる。

「ん・・・ああ、わかった。最初は俺の家のことから言おうか」

「まだ時間あるし、私もいうね。」

「じゃあ、私も。」

姉妹共々頷く

『吉野家』

ごく平凡な家(?)であった。

5人家族、神は1人として考えて良いかといわれると、まあわかんない。

だけど俺が一人として数えて欲しいので、5人

『吉野 稟』

職業…高校中退(たしか中卒とかわんなかった

神

納豆大魔神(ちよっとまで

身長…174センチ

体重…とくに設定してない（オイ

好きな物…納豆、小粒のほうが好きだが！甘納豆とかもいいぜ！納豆ってやっぱ名産だよな！！でも普通のところでもいいし、納豆に醤油は邪道っていうやつがいるが俺はそうは思わないだよ、色々な味ってのがいいじゃないか、俺はかき醤油でもくってしまえる、わさびをいれるやつもいるらしいが、あれ、やってみただけど結構新発見だよな、マジ、俺的に好きなのは卵と葱っていうくみあわ（略）嫌いな物…納豆マズイっていったやつ。

クロスヨ？

趣味…プロデュース（天才的に強くする才能をもつ

この話の中では最大にいて最高の普通の人
咲が普通とかいったらダメだよ、いきなり現れて貴方は神発言するやつなんだから

え？なっとうで狂うやつにいわれたくない？……うるさいよ。

『付け足し能力』…『全能』（たびたび能力をみにつけていきます

『吉野 才』

職業…中学生

所属部活…たぶん陸上部

身長…158センチ

体重…「えっとたしk・・・ちよ、間接はそんなにまがらないんじゃない!? やめ

スリーサイズ…「ご・・・ごめんな・・・さい」

好きな物…鯖、しめさばっていいよね、うん。あと、お前ら、出番
大体ないとかいったらお前らの髪の毛燃やすよ?あと、ラーメンが
好きかな、ついでにお兄ちゃんは、普通より上くらいかな、うん。

嫌いな物…暴走した兄(理由…めんどくさいから

趣味.. 走ること、友達と遊ぶこと

刃物を見ると、ニヤリと黒い笑顔をつくる少女
兄のように、しめさばで暴走する体質である。

ついでに、コーンスープにコーヒーと砂糖をいれて醤油を混ぜると
いう行為をした強者

稟曰く「食い物だから良い」

『吉野 明』

職業.. 大学生

身長.. 162センチ

体重.. 「ねえ、教えていいか「クロスぞ」・・・はい」

スリーサイズ.. 「聞かないでクレ」 「ナイスバディだからいつでも

いいと思ってた、でも咲に負けたからいえないつつおお!? 間接を一瞬ではずした!？」

好きな物…弟、妹、好きな食べ物は弟の料理なら、ブラコンつつたやつ、でてこい。

嫌いな物…暴走した弟（理由…妹と同文）、ひ弱な男性や、勘違い男をみると殴り殺したくなるのは私だけでしょうか。

趣味…弟をおちよくること

料理のみそ汁固体化させる最強の料理の腕をもつ
そばをつくれば、なにかドロツとした液体がだされ
インスタントラーメンは、中に何かビチビチとはねるなにかがいたりする。

カップラーメンに温泉の素をいれたことで、稟は死にかけた
納豆を混ぜようと、調味料をいれようとし、リンがブチギレる、大抵許容だが・・・

「納豆に木工用ボンドはやめてくれ！」

『両親』

でてくるの最初と最後くらいだから考えてない

「ちょっとまって！」

またない

『百合子』

職業…高校生

所属部活…ボクシング部（チャンプ

スリーサイズ…B 80 W 52 H 81

好きな物…稟、ボクシング、稟の料理

嫌いな物…狂った稟

ある出来事を話そう、稟と弁当をくうと、リンの弁当の中身が納豆
だけだったんだ。

いきなり稟は、

「ひゃっほう！」

と叫んでそれらをかき混ぜガツガツと・・・私はどうすればよかったのだろう。

「で・・・教えてくれないかな、天使達」

「百合子・・・いつのまにいた・・・」

「別にいいですが。」

『咲』

職業..天使

身長..163センチ

体重..43キロ

スリーサイズ..B94 W56 H86 (かわった設定はやめたほうがいいと経験者が語る)

年齢..14

好きな物…いまのところ稟のつくった料理は好きです。

嫌いな物…とくにありません

趣味…趣味ではないですが、楽しみなことは今から稟といくシヨツピングというものが楽しみです。

みてはいるのですが、初めてで・・・別に、稟といくのが楽しみなんじゃないですから

『瑠璃』

職業…天使長

身長…132センチ

体重…20キロ

スリーサイズ…コレに聞けと言うのか

年齢…19

好きな物…稟のつくった料理はどれも好きだよ！

嫌いな物…今はないね

趣味…人をいじm・・・漫画を読むことっておもしろいよねっ！

第十一話『設定だけなのに11話って書いて良いのかな? 一人編一(後書き)』

神たちの設定もしたほうがいいのだろうか。

ついでに書いておいて収集つかなかったと思ってる。
百合子の名字、なんだったっけ？

番外編『暇だから書こうと思った、今は後悔している』(前書き)

さて、今日から数日は書きません。

番外編『暇だから書こうと思った、今は後悔している』

物語、『神の物語』

真実の神と統一神の物語

時期的に稟が10歳のころの話。

統一神『フィート』・・・稟の父親である、そのフィートが自らの子供、リリスをみながらはあくつとため息をつく

「どうかしましたか？」

真実の神はそんな統一神をみて、声をかける。

「いや・・・なあ、子供をみて・・・な。」

「貴方のことだから、まだハーレムできねえのかよ、おせえなあ、とかいうんでしょう？」

「正解だ。」

真顔という統一神であるフィートをみて、ため息をつく。これが神の統一者だというのだからおかしな話、いや笑えない。

「候補はいまさらだが姉と妹、たしか『明』と『才』だったかな？あと百合子ってやつかな。」

「十分じゃないですか？」

「最低1000人だ。」

「どんだけ不純なんだこの種馬！」

「お前がいうと肩書きというか知識からしてツツコミとは到底思えないな。」

「大丈夫ですよ。」

「おおっ、冗談とかいってくれるか？」

「私は真実しか言いませんから」

「ひでえ」

くっくくと、フィートは笑いながら人間界では『吉野 稟』という少年、みずからの子をみる

そして、アルドもそれに続き、見てみる。場面は百合子と稟がいつしよに遊んでいる場面だ。

アルドは、百合子をみて、目を見開いた。

「百合子っていいましたっけ？この娘」

「ん、ああ、そうだな・・・お前も感じたか？」

「はい、なんていえばいいでしょうか・・・似てますね、貴方の妻、そしてリリースくんの母に。」

『イリス』、彼の愛した妻の名前。

おもいだそうか、フィートとイリス、本名は『風見』と名乗った女性のことを。

そう、あれは・・・「やめてくれ。」

「・・・いいところじゃないですか。」

「やめてくれ、イリスとの出会いは半端じゃない。」

「貴方の奇行がですか？ あった瞬間土下座して『結婚してください』ですからねえ。」

「神？ なにそれくれるの？ ってやつだった、人間なのに神を敬わないやつなんてびっくりだ。」

「顔を真っ赤にして頭をけりながら『ああ？ なにいつてんだ？ くるってんのか？』っていわれてましたよね。至極まともな反応だと思いました。」

「なんだとう！？」

真実の神と統一神の言い争いが聞こえる。

その言い争いは笑い声のようだったという。

「がんばれよ、俺の息子」

番外編『暇だから書こうと思った、今は後悔している』（後書き）

【神のシステム】補足

神の世界で人間と結ばれることは禁忌か？

これについては設定されてませんが禁忌です。

稟の母はどうなったのでしょうか？

稟の母は人間で、神とは違います。

そして『不変の権力』に関して、該当は神のみ

禁忌とよべる代物に手をだした稟の母親は。

どうなったのであろうか？

第十二話 『天使のショッピング、そして悲劇へと続く』 (前書き)

つめこみすぎたせいかな。

何故だろう、書くものが浮かんでこなくなってきた。

最終的に異次元に飛びそうで怖いっただけやしねえ……。

そしてすでに12というのに、本当に3日目。

単純計算でいくと120話くらい必要ってことだね。

うわぁ……。

瑠璃「てめえが書き始めたんだろうが？ ああ？ それで放棄とかして
みろよ、月の無い晩は気をつけることになんぞ？」

……ごめんなさい。

とりあえずこの小説のジャンルはほのぼのコメディになるでし
ょうか？

第十二話 『天使のショッピング、そして悲劇へと続く』

さて、納豆という今の現在現存しているものの中で最高と言えるものいや、最高なんてもんじゃない、神でさえかてない・・・っとまあ今は落ち着こう。

書こうと思えば原稿用紙200枚くらいかける。

ああ、昔『好きなもの』を題材にして書くってやつで書いたな〜先生がどんびきしていた。

『納豆についての本をだしてみたらどうですか？』

そんな言葉をきいて真面目にやろうとして先生にとめられた。

なんでだろう？

・・・またトリップしていた。今日は天使をショッピングへと連れて行く日。

ショッピング、というか街紹介だろう。

この街には色々ある、ショッピング街はもちろん、山や丘、花が咲くところ。

神社もある、結構有名な場所で毎年いった・・・なんだか一ヶ月

でいなくなるなんて夢みたいだ。

まあ、これが現実なのだろうけど

今現在、天使は姉妹の服をかりている。時間も結構キツイところにあるというのに、なんとも世話焼きな人だ。

まあ、俺があさるわけにもいくまい、姉妹であろうと俺が変態。

稟とかいてへんたいと書くようにされるのはまっぴらごめんである。

・・・で、もう10分たつ、遅い、果てしなく遅い。

俺は玄関から家へとあがり、姉がいる部屋の前へといく。

「これもきついですね・・・もうつけないでいいですかね・・・普通に服をきるだけで」

そんな声が聞こえてくる。

そしてドアからトントントントンと振動が伝わっている。

耳を近づけると、「なんで・・・なんで・・・畜生・・・」という言葉が聞こえてくる。

・・・なにこれ怖い

・・・気を取り直し、妹の部屋へ。

「あ、どうしたの？」

妹、才がいる。

「よお、すんだのか？」

そう聞くと、才はうなづく。そしてふう・・・とため息をつく、疲れているようだ。

「どうしたんだ？」

「小学3年の服って結構奥にいられたね・・・」

恐るべき、幼児体系

あと20分ぐらいはまつか、と稟は思った。

そして二十分がたつ。

そうすると、天使が降りてきて稟の目の前へとくる。

「終了いたしました。」

「おわったよー！」

そんな声が聞こえて振り向くと、天使姉妹と吉野姉妹がいる。

姉は何か呪詛のようなものを唱え、やつれている。

……まあいいか。

姉は稟へと近づき、紙を手渡す。

「ここで、買ってきなさい。」

その紙は姉の握力でみちみちとっている。……どこまで悔しかったのだろうか。

俺はそれを受け取り、うなづいた。主に下着のほうの店だろう、覚悟しておこう。

そしてショッピング街

ここまでくるとき……なにもなかった。

「ファンタジーだと思ってたけどここで現実を突きつけられた気分だ。」

「何か起こって欲しかったのですか？」

「いや、別に・・・」

そう言いながらも、稟はお年玉を貯金していた金をだいたい引き出し。

10万もの金を持ち、稟は歩いているのである。

そして到着したのは・・・

・・・カラフルなお店。うん、カラフルだね。

ハッハッハ、結構緊張してきたよ。

だが一人なら変態だが、こちらには絶世の美女と美少女（主にみためで考えてください）がいるんだ！

だから大丈夫！

「さあいくぞ！天使・・・」

天使が居ない。

「嘘だッ!!」

俺は道端でそう叫んだのであった。

第十二話 『天使のショッピング、そして悲劇へと続く』 (後書き)

ふう……とりあえず書きまこう。

なんだか書きたくてたまらなかったから、書いてからやることにした。

……まだ書くけどな。

第十三話 『天使のショッピング 悲劇降臨、魔王降臨』 (前書き)

・・・素を書いてやろうかと思います。

ついでにここからはもう話がないので俺が書くことになります。

俺が・・・っていうか、もともと書いていたのは俺ですが
過去につくった話が前回までってことですね、はい。

第十三話 『天使のショッピング 悲劇降臨、魔王降臨』

さて、今此処で起こったことをありのままにいうぜZE！

天使が居ない。

OK、理解した。

さて、今俺は歩き続けている。

正直にいうと、この時間に街中にいるのって結構違和感あるよな（
現実逃避中

まあ、そんなことはいいとして、今は天使を探している。

何故探しているか？あれは天使が後ろを歩いていると思ったけどいなかったことからはじめ・・・終わった。

説明終了。

さて、天使を探すために来た道を歩いている。

大丈夫だろうか？天使。

そんなこんなで歩いていると、見知った金髪がみえる、その後ろにツインテール。

おお、発見！と思いい近づくと、柄の悪い大人3人がいる。AとBとCとしよう

「お姉ちゃんかわいいねえ〜」とか「姉妹？」とか聞かれている

・・・神の加護はないようだ。

さて、近づこうとしたときに、Aは、咲の肩へと腕を回す。・・・
我が納豆パワーにより頭をかちわってやろうと思う。

「おいS ゴキンッ ・・・？」

瑠璃の金的！Aへの攻撃！

こうかは ばつぐん だ ！

「てめえら・・・俺の妹になにしてやがんだ？ああん？」

瑠璃・・・どうしちゃったんだ・・・

「い・・・妹？」

Bがいう。

そのBの手をすつと持ち上げるゴキン・・・間接とかなまやさしいものじゃない、叩き折った、主に骨と精神を

「ああ・・・？　なんだてめえら？　俺を妹とってたのか？」

ごめんなさい、思っていました。主に吉野家全てが（両親はわからないが

そして瑠璃はひと睨みをし、ヒツと怯えたCに対し・・・とび蹴りを食らわした。

身長の違いなど思わせない跳躍とすばらしいキレの蹴り。

その蹴りは華麗に美麗、吸い込まれていくようにCの頭へと直撃し、Cは数メートル飛ばされる。

そしてストンと、着地。それは玄人を思わせる。

Aは股間をおさえ、Bは手の激痛でもだえ、Cは白目をむいて倒れている。

そして稟、つまり俺は、ガタガタと（怯えの対象は主に瑠璃という
なの魔王）震えているのである。

「ちっ、本当にダメな連中だなあ？顔もだめ、ナンパテクもだめ、そして武術すらダメ？お前らはダメダメ尽くしだな？このカスども、お前はビーーーー（自主規制）でビーーーーな（自主規制）ビーーーーだな？本当にビーーーーだ。」

そして股間を押さえているAへと近づき。

手をすこしずれた瞬間、スウツと手のスキマを狙い、足を問答無用で落とす。それは見事に素で股間という名の人体の原子爆弾ともいえるものに着地。Aの絶叫が聞こえる。

鬼だ・・・鬼がバキンッ、バキンッ!?バキンッっていったよな!大丈夫か!?大丈夫なのかAエエエ!!

瑠璃はBへと近づき、瑠璃は追ったほうの逆をすつと取る。

Bのほうは、いつとられたかもわからない自然な動きで、とられたと知ったとき、顔をゆがませた。

その顔は物語る、『絶望』を

バキンッ

Ok・・・OKだよ・・・

こいつを止めてやってくれ、誰か・・・こいつらを助けてやってくれ。

俺にはこの魔王をとめる術が・・・いや、あるな。

考えても見ろ、俺の前ではこいつぶりっ子だ。

俺は三步さがり、いった。

「咲？瑠璃！どこにいったんだ？」

そういうとゆっくりと歩く

曲がろうとすると、瑠璃が飛び出してくる。

「神様！怖かったよ！」

「おお、瑠璃。探したぞ。」

そういいながら、俺は心の中で瑠璃にあだ名をつける。

『姉御』まさにそういえる。

そして男たちは全員白目をむいていたという。

ショッピングは楽しかった。

うん、楽しかったよ。服も買ったし、恥ずかしかったけど天使の下着もかった。

ただ・・・あまり覚えていない。

強烈すぎた。

あの魔王降臨が・・・。

第十三話 『天使のショッピング 悲劇降臨、魔王降臨』 (後書き)

・・・三日目で裏の瑠璃をだすという速さ、ネタがないということ
をわかっていただけるでしょうか？

まあ、だんだんと思い浮かんでくるのですが・・・。

第十四話『悲劇再臨、俺に何か恨みでもあるのかb y 稟』(前書き)

・・・日々のネタは無い
でも、フィートと風見の物語はある。

なんだろう、いつきに一週間後とかやっていいかな？

第十四話『悲劇再臨、俺に何か恨みでもあるのかb y 稟』

夜、夜である。

悲劇がまっている夜。

帰ってから今日は何故かやばいことがおきると感じていた。

まあ、魔王降臨を姉御・・・瑠璃がやったおかげで、ここまでのものはないと考え、余裕ができた。

だが、甘かった。

白めをむいて、ビクンビクンとして、俺は地面をうつぶせている。

走馬灯のように出来事が蘇っていく。

始まりは

一言

姉の一言なのだ。

「さすがに、一回くらいは料理しないでいいようにしないとね。」

俺はこの言葉に涙して、うれしかった。

だが、良く考えていなかった。

俺が料理しない・・・つまり誰が料理をする。

そう、答えは天使or吉野姉妹

さて、何度目だろうか？ いや、いくらでも説明をしてあげよう。

姉は味噌汁を固体にして出した女ダツツ！！！！

直接喰ったことは無い。

たださすがに・・・と思って食べた俺の友達がいて。

そいつは食ったあと、ゆっくりと目をとじていき、机へうつぶせて。

「すごい・・・一瞬できれいなお花畑についた・・・あれ？ 稟がいないぞ？」

とかいいだしたときには俺はどうしようかと思った。

そして、悲劇は始まる。

止まる空気。

天井へ放心している妹。

「・・・ふっ。」

俺は何かを悟ったかのように小さく笑う

「?」

天使たちはその様子を見て、疑問符をならべていた。

「まあ・・・わかるさ。」

俺は何かを悟ったかのような笑顔をうかべた。

そして、できたのは。

「・・・なにこれ？」

「ビーフシチュー」

なんだろう、とってもどす黒いよ。

なに浮いているんだろ？昆虫の足？

ウフフフ、アハハハ。

人生を諦める。

俺は涙を流して、飯をたべるのだ。

———そう、アレは12年も前だろうか。

最初に姉がつくった料理は、チキンラーメンである。

だが、チキンラーメンじゃない。チキンラーメンとして煮込もうとした輪ゴムであった。

それを目の前にだされ、俺は恐怖した。

『俺にこれをどうしろと？』

湯気がでたどんぶりをみながら、俺は啞然とした。

そう、これが姉の初めての料理である。いや、お湯に輪ゴムをいれたものは料理ではない。

「うおおお!？」

「・・・ん? どうしたんだ?」

姉は呆然とこちらをみている。

「・・・なにいれた?」

俺は姉にとう、姉は、何で聞いているんだといわんばかりにこちらをみてる。

「・・・いいから。」

俺は念を押すと、姉は口をひらく。

「・・・クロロ 「とめろおおおお!」・・・なんだ?」

クロならいいんだよ! 黒胡椒とか考えられるし! だけどごめん! クロロという三文字が最初にはいる調味料も果物も野菜もしらないわ!

俺はハッとして妹と天使姉妹をみる。

妹は、・・・焦点が定まらない目でこちらをみながら。

「あれゝなんでピッコロさんが現実にな?」

とかいってやがる！ドラゴンボールか！

天使は・・・動かない。

目が・・・死んでいる。

「よくわからないけど、まあいいや、私も食べるね。」

「え？ちょ・・・」

姉は、そのまま、この 命名『びーふしちゅ』をたべて、
そのまま動かなくなった。

「うおおおおお！姉ええええ！」

俺はそのまま全員をベットへと運ぶことになったのであった。

第十四話『悲劇再臨、俺に何か恨みでもあるのかb y 稟』（後書き）

・・・書いていて思った。

もうちょつと会話をいれてよかったかもしれない、と

第十五話『刺客 襲来』（前書き）

いやはや、とりあえず加速しなきゃ終わらない。
一週間で終わらせてやる・・・無理だけど

第十五話『刺客 襲来』

「ごちそうさま。」

昨日の悲劇を終えて、寝入り、そして朝ごはんとなった。

そしてその朝ごはんも終わり、全員で日本の礼儀作法をしていた。

今日は、金曜日となり、天使がきてから四日目となる。

「・・・ふう。」

姉も妹もでていき、天使とともに食後にコーヒーでもいれてのんびりとしていた。

そうすると、咲が口を開き、言った。

「今日は神の世界にもどりますね。ちょっと用事があるんで。」

そういわれて、天使も人間とかわんないんだなあ、と思いながら手をヒラヒラさせて

「わかった、いってらっさい。」

「うん、お土産は買ってこれないけど、たぶん神様の手紙を貰ってくると思うよ!」

あねg・・・瑠璃がそういつてきた。奇妙奇天烈なあの手紙などみたくない。

・・・そういえば何か忘れて多様な気がする・・・が、まあいい、忘れてるってことは、それほど重要ではないってことだ。

俺は欠伸をして、天使たちに「いつごろいくんだ？」ときく。

「いんです。」

「は？」

その答えに、意味がわからずじまいでいると、なにか地震が起きる。

「うお！？じ・・・地震？」

「扉がきます。」

扉？どこから！？床ぶちやぶってとか窓ぶちやぶってとかやめてよ！？

そう思っていると、扉が何もないところから生まれる。

ミスリル、というような色合い、なんというか俺の中でのミスリルは水色なんだよな、透き通った。

「・・・イレギュラー。ってかなんで地震怒ったんだ？」

「なにもないところに物質を無理矢理空間を突き破ってもってくる。簡単にいえば、水に人差し指をいれると、指をいれただけ水の高さが増えるし、波もできる。それでもどすと、戻ろうとして波ができますよね？」

つまり、水に指をいれたときの振動と、もどしたときの戻ろうとする力による振動。

まあ、波動といったほうがいいだろうか、それが今の地震なのである。

「ちなみに、地震ではなく、空間振動といったほうがいいかもしれません。稟。」

よくわかった。よくわからなかったらごめんな

「さて、私たちはいきますね。」

「じゃあねー！神様ー！」

そういつて彼女らは扉へとすすんでいった。

・・・やっぱなにか忘れている。

そう思い、考えてみる。

ソファアーに座ってみる。思いつかない。

どうせならと、散歩をでかける。

十分ぐらいで戻ってくると、家に人の気配。

姉か妹？はたまた天使かと思ってみてみると。

・・・知らない人が居た。

めがねで長髪、緑の髪がさらさらとゆれて。

彼女は俺をみて、こういった。

「だ・・・誰？」

俺は呼びかけると、彼女はこちらをふりむき、顔を真っ赤にさせてしまう。

「うう・・・くるタイミングがおかしかったなあ・・・」

「?..?」

何をいつているのかさっぱりである。

「なんで入れ替わりになっちゃったかなあ・・・？」

そういつて彼女はフルフルと顔を振る。それは犬のようであった。

「ううつ、でも負けちゃダメだよエリサ！」

どうやら彼女はエリサというらしい。っていうか本当になんで此処にいるのだろう。

そう思い、彼女を覗き込もうとすると、彼女はにっこりと笑ってこちらにビッと軍隊という敬礼をする。

そして告げるのだ。

日常破壊者が現れることを

「こんにちは、刺客です。」

我が神である父を恨んだ。

そしてあまりにも刺客にみえない彼女に唾然としたという。

第十五話『刺客 襲来』（後書き）

なんだろう、これ。

人いっきに出しすぎ

これまで番外、プロローグあわせて17は書いた。

で、出てきたのは

吉野稟

吉野才

吉野明

稟の両親。

フィート（統一神）

アルド（真実の神）

百合子

咲

瑠璃

で、今回はエリサ。

さらに他の神も居るうえに、稟の友達も出すつもり
そしてさらには風見（稟の母）の話もまだあるし。

・・・うわめんどくS

第十六話 『チートになるかもしれない主人公、でもその力、意味無い』 (前書き)

さて、はじまりましたね。

瑠璃「つーかよお？俺たち何しに神の世界にいったんだ？」

咲「姉さん、そんなことをいってしまっただメです。この話を書くことができなくなります。」

う・・・うるさいよ。

ついでにいいますと、瑠璃という名前は考えていた時期は瑠璃でしたが

咲は最初刹でした。

第十六話『チートになるかもしれない主人公、でもその力、意味無い』

これ・・・どうするよ。

く前回の話く

刺客きた、まじやべえ。

終了

さて、この状態を私目はなにをすればいいんでしょうか、まったくわかりません。

さて、とりあえず気を取り直して言います。

「戦うんですか？」

「はい♪。」

このうれしそうな言葉で分かった。

・・・こいつ、戦闘狂だ。

イヤーーーーッ！親父！親父いいい！なんちゅうもんを送ってやがったんじゃ！ボケエッ！

「神様の苦しむ声を聞けるなんて・・・ウヘヘ。」

おとなしそうな少女はおぞましい一言を放つ。

やめろ、やめてくれ、普通に死ぬからね。

僕神様だよお、まだ子供だから戦えな・・・ダメですよね、あの親父の放った刺客に通じるわけもなく。

なんだろう、ククク・・・涙が出てこないよ、心の中ではもうあきれて物も言えない状態だな。

「さてえっ、殺りあいましょうか☆」

キャラがどんどん変わっていつているよ、おい、誰かタスケテー！

「私の名前は、エリサ・・・では、参ります。すいっちーおんっ。」

そんなことをいいながらポケットからボタンをとりだし、赤いボタンを押す。

そうすると、いつきに風景が一変する。

「・・・。」

「さて・・・」「ちよいまち」・・・なんですかあ？」

「今の原理を教えてください、ボタンの。」

「簡単にいえばどっかのエ○ヤシロ○さんの固有結界だと思ってください。」

いや、わけわからないから。

「しかたありませんねえ、神術の定義を教えましょう。まあ分かっているとおりに、神術とは、神の力を術とする、奇跡に近い技、ですね。」

いや、そこまでわかっていないけど。

「で、神術っていうのは、もともとあるものですから、料理での包丁のようなものです。使用方法さえわかり、ある程度鍛錬を続ければ多彩に使用可能。大体、人間には古来から気というものが備わっています。しかし、それを使える人はもうほとんどいない、それは何故か？知らないからです。それを知る機会も稀です。神術を貴方が知らないのも仕方がないと思いますが・・・正直にいいましょう、知らなければ相手にならない・・・ので、教えようかなと思います、・・・強くなればおもしろそうですし・・・ウヘヘ・・・」

なにこいつ、怖い

「では、感じましょう、神術っていうのは、ハ○ターハン○ーでいう念能力の覚え方と同じです。」

伏字が意味をもっていないと思うんだよ、俺は

「神気・・・を送り、出し方を知らない体に送り込み、神気という能力の存在を知れば、体と共に脳が理解し、使えるようになります。・・・まともにつかえるようになるのは時間がかかりますが。」

・・・って、それってまともに扱えなければダメなんじゃなかったっけ？

「さあいきますよ！えい！」

ちよま・・・なにこれ・・・

「どんな感じですか？」

「気色悪いというか神々しいというか、とてつなくウザいけどとてもなく敬わなきゃいけない感じ。」

「なにそれ。」

俺が聞きたい。

「まあいいです、とりあえず○ンターハンタ○ーみたいに想像するのです！」

サーイエッサー

「おお、集まってきた、心の中になにか生暖かいドロツとしたものが気色悪い。」

たとえばるなら、コタツで温めたところに片栗粉を混ぜてドロツとしたものを服の中にいれられた感じ。

「・・・たしかに気色悪いですね。」

それがビチビチと動くものだからたまったものじゃない。

「・・・考えたくも無いですね。神は神術を駆使して神々しさを調

第十六話 『チートになるかもしれない主人公、でもその力、意味無い』 (後書き)

次回、戦闘・・・たぶん。

とりあえず数回はシリアスっぽくやりますね。

神は『何故こうなるか』を知ればなんでもやれるが・・・というところで

今回は刺客を利用して、設定理解をしてほしいので。

だいたい、めんどくさいことに変なところでまともに設定されています

その上、めんどくさいことに大雑把な部分は設定されてません。

ついでにこれは四日目です。あと26、27日俺はどうすればいいんでしょう、いまだに迷っております。

第十七話『戦闘と、父』（前書き）

・・・めんどくせえ

戦闘書くのがめんどくせえ

第十七話『戦闘と、父』

今から約1週間前、彼女ことエリサは統一神フィートのもとに呼ばれた。

「なんでしょうか？フィート様。」

そういうと、フィートはこっちをゆっくり向いてこういった。

「・・・リリス、人間名で、稟を強くしてきてくれ。」

そういつてフィートは立ち上がり、リリアに礼をする。

「統一神様、別にそんなことはなくていいのです。ご命令をいただければ・・・」

「いや、我が子は、弱い、だから迷惑をかけるかもしれない・・・だが、頼む。」

・・・エリサは、親の気持ちと言うものを感じた。

だからこそ、うなづく。

「ですが、とりあえず戦女神様も一緒にいったほうがよい気がしますが。」

「ヤメロ」

「・・・えっと・・・強くなるためにはそれが一番ですけど。」

「シヌダロ、アイツノシュギヨウ・・・」

いや、確かに死ぬかもしれないですが。

「神気を覚えれば死ぬことはないかと思いますが。神気解放で、身体能力、治癒力ともに高くなりますから・・・。」

「それでも死ぬ可能性はあるんだぞ、人間界でいえばバイクで引きずられながらかわらを20キロ走るくらいの危険性をもっている!」

「神の体なら死にはいたりませんが。」

「やめうおおお!? ナイフは何十本もこちらにきた!?!」

ナイフが横から飛んできたのでフィートはすべて拳で横の側面をたたき、落とす。

「黙っていれば、そこまでやったことは無いはずだが?」

「う・・・ルベリア・・・」

でてきたのは真面目に美人といえる戦女神、ルベリア。長い金髪を風にたなびかせ、フィートへと近づく

「なあ? 統一神様よお?」

「わ・・・わかったよ、お前もいけがいいだろう。」

そういうと、ルベリアはニヤリと笑う。

「まあ、少なくとも最初はエリサが戦うことにしよう。それをみて、こいつならこれくらいやれば・・・の2倍の修行をしよう。」

「っておいおい！二倍って不吉な数字が聞こえたぐぼおっ！？痛いですなんでもありませんやっちゃってください。」

ものすごく百合子と稟の関係を思い出せる会話。稟の親というものも理解できる。

いつのまにかいた真実の神アルドが手を額にあて、ヤレヤレといった感じでいた。

「本当に貴方は強気の女性と知り合うことになりますよね・・・」

「うっせ！うっせ！」

こうして刺客はできた。

で、現在。

エリサと稟が対峙し、稟はキーホルダーをとりだし

「ON!」と叫ぶ。そうすると氷雨がでてきて、稟はどうせならと時代劇をみて考えた剣の型を真似する。

理解すれば可能、その能力をフルに使って戦う。

「いくぞっ!」

稟は即座に低めの体制で走り、下から刀で切る。切り上げる。狙いは右肩。両手でもった刀に力をこめて撃つ。

エリサはいつのまにかもっていた大剣、ゆうに三メートルはあろうか・・・の剣を軽々と持ち上げ防御する。

稟は、自分の結構な速さに驚き、神はまったくなんでもありだなあと笑う。

稟は防御した反動を使い、回転しながら飛び、左へと回り込みさらに撃つ。

「結構いい戦いになりそうですね？ 私が剣をふらなければ。」

・・・その言葉に、稟は驚き。

そして向かってきた剣に気づく。

即時対応にして、避ける方法を考えればひざを曲げればギリギリでは避けられたであろう。

その技法は少なくとも理解はすればである。

だが、稟にその時間はなく、理解する前に吹き飛ばされる。

なんていうバカ力だと稟は思いながらも、何メートルも飛ばされ、地面へと叩きつけられる。

そして即座に意識を飛ばし、稟はそこから全く動かなくなる。

「反射的速攻の対応。なにかがきたとき、どうよけるかという対応を反射的に最善をとるほどの経験をつまなければ神は最強になりえませんよ。反射的速攻対応、それは攻撃にも防御にも必要不可欠です。」

エリザは言う。神の力は万能にあらず、経験という要がなければ、能力は生まれない。

理解し、どう扱い、どう操作するか、魔法でいうなれば、理解すれば大体はできる。

だが、それは戦闘のとき以外。

戦闘時にどんなに魔法がつかえようとも、近づかれ、そしてそれに反応しても、その攻撃の理解をして、避ける方法を理解しなければ避けられない。神だろうとなんだだろうと死ぬ。

「終わったのか？なんだ、あっけないねえ。」

物陰から戦女神、ルベリアが出てきた、ふうとため息をつき言う。

「まあ、喧嘩はあるでしょうが、このレベルはやれるかはわかりませんからねえ……。経験により神は強くなりますから。」

はつきりいつてしまえば、ドラゴンボールのサイヤ人と考えればいい。修行すればするほど強くなる。

それに全能の能力を付与したものが神……。なんというチート。

「さっさと強くなってもらいましょうか。」

「そうだね。」

エリザとルベリアは互いに笑いあう。

その笑いは他人から見てゾツとするものであったという。

第十七話『戦闘と、父』（後書き）

・・・ふう。

戦闘が少ない。

まあ力の差をみればこの程度で十分ですが。

遊ぶわけにもいかないし、正直遊んでいるとどんどん行をつかうので。

第十八話『ダレカタスケ・・・』(前書き)

稟「・・・」

おい、どうした？

稟「ガクガクガクガクガクガクガクガク」

返事がない、ただの屍のようだ。

第十八話 『ダレカタスケ・・・』

起きたとき・・・みえたのは

純粋な笑みをした女性であった。

「・・・」

なにかを悟ったような眼のレベルをあげた稟は、それをみながら思った。

『まるで子供が新しいおもちゃをみつけたときのような純粋な笑みだ』

ダレカタスケテ

こんな思いは、・・・ここまでの思いは始めただ。

「私の名前はルベリア・・・戦女神だ。」

「エリサです。天使ですね。」

笑みは変わらずニヤニヤと。

「強くしろといわれまして」

「きたわけだ。」

・・・あの糞親父か！殺意がサラに沸く、これ以上ないってぐらい。

「ふむ、すばらしい殺気だな。」

「統一神様に対するものですねえ。」

うおおおおお！クロス！

「というわけで強くしてください。親父を打ち殺し、そして東京湾にコンクリートという名の封印で永遠の封印をほどこすために。」

「それは打ち殺して、コンクリで固めて東京湾にしずめるぞ！ってことですね。」

うなづく。

「く……くははは！さすがあいつらの子供だっ！」

そういつて笑うルベリアさんは心底楽しそうに笑い、俺をみる。

「……というか、父さんと母さんについて教えてくれませんか？」

「ん……？知らなかったのか？」

「はい。教えてくれればいいのですが。」

そういうと、ルベリアさんは考える。そして空を数秒みあげたあと、こちらをみて笑った。

「それはお前の父さんから聞け。」

・・・一ヶ月後ということか。

「わかりました、クビを締め上げ吐かせます。」

「ブハハハ！お前は母親似ってことだな！」

「よかったーわーいわーい。」

なおも笑い続けるルベリアさんをみながら、俺は強くなろうと決意する。

主に親父をぶちのめすために。どっかに神でも拘束できる鎖ないかな、海に沈めてやる

そして・・・エリサさんがいう。

「さて、ここで一年修行です。」

は？

「強くなりたいんですね？」

エリサさん、一年って神になっているんじゃないでしょうか？

「神・・・は向こうの時間で一ヶ月ですね？」

「いや、そうですけど・・・よくわからないんですけど。」

「うん・・・まあ次元という考えは人間にはないですから・・・いわば、次元と時の流れは、個々にあると考えると考えてください。いわば、次元と次元は接してない状態で、そのまわりに時という膜がついている。・・・想像してみてください。ここにボールがあります。そしてマジック。」

そういつてボールを二個ほどとりだし、エリサさんがそこにキュッキュと『世界』という文字を書く。

「この一つがこの次元とします。」

緑と赤のボールの中で、緑をこの次元、つまり俺がいる次元ということにするらしい。

「そして赤のほうを、この次元とします。つまり私のスイッチで作

り出した世界です。」

そういったあとに、液体をとりだし、筆をその液体に浸す。

そして世界とかかれたボールにぬりつける。

「この液体と時だと思ってください。・・・よしできたっ☆、これがこの次元と私たちの次元です。このボールは別々のものですよ？色も違います。世界としての構成自体は同じなので○という形にたもっておりますが、これとこれはすでに別のものです、これを同じだと思えますか？丸という世界構成では同じですが、色も違いますし、このボールは個々のものを持ちます。」

・・・よくわからないけど理解はした。

次元と次元同士に時のつながりは無いといいたいのだろう、なんて長ったらしい説明だ。

そのうえにこの人は先生になれないであろう。

「・・・なにか失礼なことを考えました？」

「いえ、なんでもありません☆」

やべえ、この人即座に背中に大剣を生み出しやがった、怖え。

「さて、わかったならわかりますよね？この次元にどんな時間が過ぎてても、君が居た人間の世界にはなんの影響もありません。こちらの時間にとらわれますから、体は時を数えますが。」

「・・・えっと、それでなんで一年？」

「変わりすぎてもダメですし。」

・・・うん、現実的だけどファンタジー

「じゃ・・・いきましょーか。」

「死ぬなよ。」

いま不吉な言葉がきこえ・・・イヤダアアッ！

ルベリアさんっ！なにその大きな斧！？

「ん・・・ヴァルキートだが・・・なにか？」

「いや、死なないですよね？」

「死なないようにがんばれ。」

今、なにか不吉な言葉が・・・まって！まってください！

斧をもち、剣をもち、すごい笑顔で二人が近づいてくる。

父よ・・・なんちゅうもんを送ってきた・・・

そして俺の人生は・・・

終わるか!!

「・・・ぜえ・・・はあ・・・。」

一年たった。修行とか描写できな・・・いや、なんでもない。

俺はもとの家のリビングへと降り立ち、平和をかみ締めていた。

涙が流れ続けている。

この一年は一生消えないトラウマだ。

もういや、もうやめて。

もう俺の心をいたぶるのはやめてええええつ

「ふう・・・まあ次第点だな。」

ルベリアさんが家のソファで座ってふうとため息をつく。

「楽しかったですう。」

何お前なにテカテカしているの。

「またやりたいですね。」

勘弁してください

俺の意識は飛んでいくのだった。

第十八話『ダレカタスケ・・・』(後書き)

稟「ガクガクガクガク」

・・・どこまでやられたんだろうか。

ルベリア「ん・・・まあ、私は優しいからな、10メートルの崖から落とした程度の修行だ。死んだら負けっていうゲームだ。」

稟「どんな卑屈なゲームですかっ!？」

第十九話 『家族の男性率がサラに減っていく。』（前書き）

稟「そういえば、俺ってどんぐらい強くなったんだ？」

追加要素

神気による治癒力増加、筋力強化。

知れば可能ということで、気的能力追加。

神気による構成理解そして神気をあやつり魔術紛いなことができる。

神術追加氷雨の強化。

攻撃能力、そもそもの判断力増強。

即時対応と即時理解。

剣術に関しての理解。

体術に対しての理解。

稟「・・・すごいんじゃないかな？わーい！いやっふう！」

しかし使うことはない。すくなくとも今は、一ヶ月は。

稟「・・・」

第十九話 『家族の男性率がサラに減っていく。』

ん．．．．んん．．．寝てたか．．．

真っ暗だな．．．いや、目をつぶっているからか。

「．．．」

ゆっくりと目をあけると、そこには百合子がいた。

「やあ、二日ぶり、とても言おうかな？」

「おお．．．百合子．．．俺は今何をされているのかな？」

「拘束している。」

いや、拘束しているじゃないよ、何でされているんだ俺は。

「．．．一つ聞こうか。」

「ん．．．ああ、何でも聞いてくれ。」

「ああ、あの方たちは誰だい？」

そういつて視線をたどると、ルベリアとエリサがいた。

修行中に呼び捨てをOKされたので、お言葉に甘えていた。

「ルベリアさんと．．．エリサさんだね。」

さすがに幼馴染の前で呼び捨てはいけなかもしれない。戦女神だし。

「・・・神関係かい？」

「その質問は私が答えよう。」

そういつてルベリアさんは会話に入ってくる。

「私は統一神、つまり稟の父にあたるものから強くしろということからここにきた。名前はルベリア、戦女神だ。」

「私は刺客です。エリサと申します。」

「・・・刺客？」

その言葉をきいて百合子が身構える。

「いやあ、お姉さん強そうですが・・・まあやらないほうがいいと思いますよ。神気ありませんし。」

「神気・・・？というかさっきから思ったんだが、稟のガタイがよくなっている気がするのだが。」

「ああ、私たちが強くしていた。結構強くなったぞ？エリサとやりあえるくらいは。」

やめてっ、俺のトラウマを掘り起こさないでっ！

戦えるようになったらエリサったらとてつもなくうれしそうな顔をするんだもの。

『クキャ・・・クキャキャキャ!』

あの笑いは一生のトラウマものだろう。

最初ある程度強くなって手合わせしたら、とてつもなく悪寒を覚えた。

「そうか、ありがたいが、なんだか複雑だな。・・・とりあえず、稟。」

「はい?なんだ?」

「明日、遊びに行こうか。」

「ん・・・明日は・・・いつだっけ。」

やばい、一年もたつと曜日感覚が皆無だ。

「明日は土曜日だ、すぐに学校が終わる。」

「ん・・・ああ。」

俺はのびをしながら起き上がろうとする。

・・・って百合子に膝枕されていた。男としてとてつもなくうれしいぞ。

「じゃあ、いくか？どこいく？」

「映画だな、なに、ちょっとしたアニメだ。好きなタレントが声優をやるって聞いたものだからいきたいんだが。」

「おう、わかったよ。」

「さて、強くなったんだよな？稟。」

「・・・うん？」

「強くなったんだよな？ほらたて」

「・・・ん？」

なにをやっているんだ？百合子。

「いくぞっ！はああああっ！」

え・・・ちょ・・・！？

メキッという音がして俺はいきなり殴られ、吹き飛ばされそうにな

る。地面に無理矢理足を置き、飛ばないようにささえたが、なんだか異様な威力があった。

「・・・ぐふっ・・・っーかお前・・・手加減してたな・・・？」

「ふっふー、これを受けて倒れないやつ・・・いや意識がとばないやつは初めてだ。大体大会で本気をだしたら相手が白眼をむいてビクンビクンとしているからな。」

恐るべき女・・・っていうか俺の周りの女性はだいたいおかしい・・・。

特に瑠璃特に瑠璃特に瑠璃、はっ！？殺気！？

「強くなったな稟。なんだかとてつもなくしっくり来ないが・・・」

殴られて強くなったといわれたのは初めてだ

「ふむ・・・まあこれも成長とやらだな。」

百合子は笑う。

なんだか、その笑顔は寂しそうであった。

そんなとき

「「ただいまー」という言葉が玄関でし、そして扉がリビングに発生する。

天使姉妹と吉野姉妹が帰ってきたのだ。

日常ってヤツを理解した。

マジでうれしいかもしれない、今。

「・・・なんか増えてるけど・・・お話・・・しようか？」

「・・・ファンタジー・・・」

「たくさんきましたね、稟。大丈夫でしょうか？」

「久しぶり・・・エリサ。」

姉御、いや瑠璃・・・なんて黒い笑顔を・・・。

いまわかった。

俺の平穏などもうないことを

第十九話『家族の男性率がサラに減っていく。』（後書き）

キャラが増えすぎた。いま後悔している。そしてさらに稟の友達も増えるつもりであったりする。

稟

才

明

百合子

咲

瑠璃（姉御）

フィート

アルド

稟の両親

ルベリア

エリサ

11人。

正直どんな口調だったか忘れる。さらに増えるからご注意ください。

第二十話『過去への手紙』（前書き）

追加点

『主人公のうたれ強さUP』

治癒力とにもよくつかいます♪

稟「・・・・・・」

第二十話『過去への手紙』

神への一ヶ月。

稟は父親にあえるまでの時間。いいことなんだけど、私にとってはすこしばかり悲しい。

いつまでもあえると思っていた。幼馴染として毎日過ごしてきた。

うれしい日々。でも、それがもうすぐ終わりをつげる。

しかもそのカウントダウンさえできる。

いきなりだったらどんなによかったことか。

毎日毎日、あと何日と数えてしまう。

心の整理ができるまで、何日もかかり、また会うときに時間がかかってしまった。

だからこそ、私はきめたのだ、いっしょに遊びにいかうと誘おうと。

で・・・なんで女性が増えてるのカナ？

とりあえず縄跳びで縛っておこう、と思った。by百合子

拘束がとけないまま夕飯を作る時間になってとかれた、大方は喋ってくれると思っていたのだが、なんだろう天の使いなのか本当にこいつら。

瑠璃とともに黒い笑みを浮かべるエリサ

そしてソファで寝始めるルベリア

妹と姉はこちらをみて、黒いオーラを出し始める。

おお、本当に姉妹なんだな、と思った。

そんなとこにて欲しくともなんともないけどな。

まあいい、そこはまあいい。百合子はなんだかうれしそうにブツブツいっているけど実害はない。

だが咲が何故かプロレス技を仕掛けてくれた。

痛い、痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイ

なに！？なんでこんなことをしてきているの？

そんなことをいっていたら手紙を渡された。

「統一神様からです。」

「糞親父からか・・・」

そういつて、開けてみる。

そこには・・・

始まりが書かれていた。

俺に親父が願ったこと、そしてその始まり。

『革命』それを起こせと親父は言う。

『・・・手紙でのやりとりだけだ、直接言いたいのが、我慢したい。お前はいまだ、そっちの世界の住人というそっちの世界のルールに囚われているからな。

だから、俺はお前に手紙で伝えたい。リリース・・・いや、稟。

お前は、神の世界に革命を起こして欲しい』

なにが、と言いたかった。

意味が分からないといいたかった。

革命、だって？

なんで？

俺は怒りが満ちてくる。

意味が分からない、ここに落とされて、迷惑かけて。

みんなうれしいっていつてくれている、でも・・・さあ。

何故、革命を起こせと子供に言うのだ？

手紙をもつ、手に握力を持たせる。

ミチミチと手紙が変形していくのがわかる。

なんなんだよ、なにがやりたいんだよ。

勝手にやってくれよ！

勝手にしろよ！

『お前は怒るだろう、何故だ。とな。』

「・・・ああ怒ってるさ」

静かにさういう。

『だから、咲に渡したものをつかってくれ。俺が何故やったか、そ

れがわかるようになる。

俺の過去をみろ。

それにより

お前のすすむべきみちをきめろ

俺は親だ。

子供に望む道はあるが、それを強制はしない。

する親など親ではあってならぬ

だからこそ、お前はすすむべき道を見つけろ』

それをみて、俺はドクンと心臓がはねるのを感じる。

もう、教えられるのか。

『革命』そして俺の親父の過去。

そこには俺の出生もかかれるかもしれない。

でも、それを知るのが怖い。

期待と恐怖、それがいりまじり、俺は咲をみる。

俺の視線に気づき、咲はコクンとうなづき、一つのカードを渡す。

「このカードは、時を切り取り、ここに入れたものです。『時の断片』とそのままで呼ばれております。・・・あとはきめてください。私たちは天使ですから、きめたことにしたがいましょう。」

「咲は、知っているのか？」

うなづく。

俺はふっと笑っていった。

「そもそも、辛いことになるなんて別にどうってことないんだよな、姉の料理にくらべばぎゃあっ!？」 「殴るわよ」殴ってますよ!？殴ってますよお姉さん!」

俺はきめた、見てやろうと。

「あぁっ、俺は見てやろうと思う!」

俺は決心　ぐうぐ　・・・。

「お兄ちゃん、おなか減った。」

才・・・TPOをわきまえような・・・

第二十話『過去への手紙』（後書き）

たぶん過去編です。

わかっていただけるように書くことがすでにありません

フハハ！

第二十一話『墮落した世界、革命への望み』（前書き）

飯も食べ終わり、俺はカードをもって部屋へと戻る。

過去、俺は、なんなのだろうか。

そう思い、俺はカードを額へと近づけ、記憶をみるのである。

第二十一話『墮落した世界、革命への望み』

統一神 『フィート』

墮落、というものが感じられる。

眼は死に始める。神だから死ぬこともできない。

なにもかかわらない、なんてことはない。

どんな人生であっても、会話がかわったりはするだろう。

会話という大雑把な流れがかわることはないが、人の社会は換わりつつある。

だが、神の世界は墮落の一途をたどる。

つまらない

なにもかもつまらない。

親父にいつてきた言葉がある。

なんで、変わろうとしない。

そんな不満が毎日毎日あり続けていた。

でも、わかった。

神になってみて分かったのだ。

『変わらないではなく変われない』

なんてつまらない、ふざけないでほしい。

こんな世界は何故あるのだろうか？

「・・・わかりません。」

親友、といっても親と子のようなものであるが、アルドがそうだった。

「つまらない。なにかもだ。」

「ええ・・・どうしてこうもここはつまらないことだらけなのでしょうか。」

「変化しない、人は変化するのに、なんで神は変化しない。」

「・・・神が絶対の存在だからでしょう。」

「そんなもの、人より劣っているようなものだ。」

ふざけないでほしい。なんだこの神の世界は。

「現実に見て、感じられることを今感じている、といったほうがいいでしょうか。」

「・・・そうだな。」

なにもかも、いやになる。

「悲しみなどない。ただ苦しい世界。」

「これが、神の世界ってやつかよ・・・っ！」

吐き出すように愚痴る。

夢にみた。

神は崇高な存在だと人を見て考えた。

違った。神はたしかに崇高だ、だが・・・

「とてつもなく、つまらない。」

ただそれだけが存在する世界で、俺は人間をうらやましく思った。

その変化で落ちていく人はいる、絶望する人はいる。

でも、何も変わらない世界をみてみるといい。

希望がない、はっきりいってしまえばそれで終わる。

希望がないから努力がない

努力がないからこそ、未来を創ろうとする力さえ起きない

統一神フィートは、なにもかわらないと、あきれた。

なにもかわらない。

俺程度がなにをやっても

統一神なんて肩書きはどうでもいい。

力が欲しい。

すべての神が願うような、変化の力を。

変化の神はいる。

でも、そいつは変化するという言語にしばられ、変化するがその変化でさえ制限される。

終わらない、なにも始まらない

「人に・・・会いたい。」

ポツリとでた。

「そうだ、会えばいい。」

しかし、それは禁忌では？

「あのな・・・神がどこにいったって縛られないだろ、あるだけの法律なんてないだけのものだ、ただの置物。」

そういうと、アルドは笑う。

「そうですね、では・・・いきましょうか。」

そして、彼は出会うのである『彼女』に

第二十一話『墮落した世界、革命への望み』（後書き）

めんどくせえっていわれるかもしれない回です。

色で言うなら灰色の雰囲気をもっています。

正直、誤字が多すぎるのでやめたいデスネ

第二十二話『出会い、そして恋』（前書き）

・ ・ ・ ふう

本当にどんぐらいの日数かかるんでしょうか、これ。

第二十二話『出会い、そして恋』

「神様、I N天国」

「なにをいつているんですか。」

ふぎけながら俺は天国へとはいっていく。

バレたら一大事、・・・とはいかない。別になにもかわりやあしな
い。

そう思いながら歩いていると、何か声が聞こえる。

「うおお、人の声だぞアルド！」

「そうですね。」

興奮するフィートを見て、アルドはクスリと笑う。

いまだ神の世界の毒気に侵されていない彼は、まるで子供のよう
にしゃいでいた。

そして音がするほうへとフィートは走っていった。

・・・

「・・・」

「・・・」

そこは、なんだかよくわからない光景であった。

男たちは全員ボコボコにされて、転がっている。

とてつもない良いキレのパンチと蹴りを近づいてくる男たちに食らわせている

それはとてつもなく強く、とてつもなく美しい。

それは神の常識である。『男が力をもつ』という勝手に作られた常識を大きく塗りつぶすものであった。

それをみて、フィートはドキドキした。

その美しさと、神の常識を覆す力。

尊敬せずになにができようか。

それは一目ぼれといっても過言ではない。

なんだか流血沙汰だが、そんなものを気にせず、神は思った。

『美しい、そして力強い』と。

そんな尊敬のまなざしをみながら、フィートは近づいていく。

なおも彼女は男共をぶっ飛ばし続ける。

すでに何十人であろうか。

そして最後の一人が彼女へと近づき、捕まえようとするが、その男の急所……つまり金的をけりつけ、男は悶絶して転がる。

それをみたあと、アルドはハッとわれに返った。

フィートをみて、彼女に近づこうとしているのがわかる。

「……ってフィート！」

呼ぶが、フィートは止まらず、いつきに走りだす。

彼女がフィートに気づき、構える

「本当に男共は……」

そうぐちって、彼女は近づくフィートに対し、攻撃の態勢をし、いつでも反撃にでれるようにする。

「さあどっからでもきなっ！」

そう蹴りを放つと、フィートはさっと身をちぢこませて、その蹴りをよける。

やばい、そう彼女が判断したとき、思いがけないことは起こった。

フィートは土下座して言い放つのである。

「結婚してくださいっ！」

「
・
・
・
」

長い沈黙の後、彼女が放った言葉は

「
はあ？
」

第二十二話『出会い、そして恋』（後書き）

ここまで書けたら思い残すことはないんですよ。

実を言うと。

第二十三話『縛られぬ、心』

「はあ？」

呆然とした声に、真実の神、アルドは当然の反応だと思った。

「だから、結婚してくださグボオッ!？」

再度言おうとするフィートに回しげりを喰らわせる女性。

アルドはそれを見て、「あーあ・・・」という声をだす。

これが統一神かよ。とちょっと心の黒い部分で思ったりした。

「な・・・ななななにいつてんだよ!？」

あわあわとしながら女性は真っ赤な顔を隠すように手をパタパタとさせる。

「あなたの美しさにほれてしまいましたっ！」

「バツ・・・バカ!！」

再度蹴る、だがフィートはやめない。フィートは真面目に好きだと感じた。

アルドはそれをみながら、親友である男の眼に、火がともるのを感じた。

そしてアルドは、おもしろいと感じた。

神と人間と、交わることに、それは禁忌である。

だが、統一神である彼は、魂に火をともし、そしてそのことを考える暇もなく、彼女を好きになった。

人間というものをアルドは尊敬した。

「んで・・・あんたは私のどこが好きになったんだ？」

「ぶち破る力・・・そして美しさ。」

フィートは真剣に考え、力説する。

ああ、すばらしきや人間とでも言いたげだ。

「う・・・」

そんな熱気に人間の女性もおされぎみ・・・

「結婚を・・・してくださいっ。」

「だけどさ・・・だけどだけどさ・・・私君のこと・・・あまりしらないし・・・第一名前だって知らないだろう！」

何この人、カワイイとアルドは変わりように驚きつつ思う。

純情といったところか。戦闘狂というわけでもあるまい。真っ赤にしながらワタワタする人間の女性。

なんていうか・・・『萌え』である。

「俺の名前はフィート！さあこれでいいだろう！」

「ふわっ、え・・・えと、風見・・・っていうんだけど・・・ってダメ！まだ結婚ダメ！」

「俺のすべてを教えよう！隅々だ！」

「ってぬぐなあっ！」

ゴキンッという音が起きる。アルドでさえ股間を押さえた。

「,&%#&,(%\$（,」

うん・・・痛いよな・・・。

「だが・・・負けない！男の子だもん！」

「口をはさまないようにしてきましたが、その壊れっぷりはみてる

こっちが恥ずかしいのでやめてください!」

「あ、アルド・・・いたんだ?」

「・・・っておいしいいい!忘れてたんですかっ!?」

「・・・やだな、9割程度だよ。」

「1割ってどんだけですか!?」

ぎゃあぎゃあど騒ぐフィートとアルドをみて、風見といった女性が
はあ、とため息をつく。

「じゃ・・・わたしはこれ 「逃がすかああああっ!」 うわあああ
あ!?」

フィートがかえるのようにジャンプをしたあと、いききに掴む。

「逃がさないぞ!俺は神だからなっ!」

「・・・んあああ?神ってお前神なのか!?」

「そうだ!愛している!」

「そんな簡単に愛しているなんていうな!っていうか、神と人間が
結婚することに関して、なにかないのか!?」

「ある!」

「あんのかよ!じゃあやめておけよ!」

「だが断る！」

「断るなよ！」却下だ！

俺はお前が好きで好きでしようがなくなっちまった！」

よくわからない出会いの下、フィートと風見の物語は始まった。

第二十三話『縛られぬ、心』（後書き）

稟「俺の父さんアブノーマル」

お前がいつちやあいけねえよ・・・納豆大魔神様

稟「・・・」

第二十四話『引き裂かれる、二人』（前書き）

わし、人が好む恋愛とかかけんし

稟「お前が好き好んでやってんだろうがつ?!」

第二十四話『引き裂かれる、二人』

「・・・こいつ、なんの神なんだ？」

風見はアルドに問う。愛の告白とやらをしていた

「統一神です。」

アルドが答えると。風見は啞然とする。

「こいつが・・・統一神・・・なんていうか・・・神の世界も・・・」

「いわんといってください。」

顔を真っ赤にしながら、風見はふうとため息をつく。

やっかいなやつにすかれちゃったものだ。そう思いながら、心の中で、なにかうれしさを感じていた。

自分の乱暴さをみて、美しいといってくれた。

他のやつらは、怖いとかいって逃げていくのに。

「ふう・・・」

「（・・・なんか、うれしそうですね。）」

友人の成長と、禁忌に対する不安。

それをアルドは感じていた。

それからというものの、フィートは毎日風見と会いに行く。

「風見！君は今日からイリスだっ！」

「なにいつてんだお前！？」

といった、適当なことをフィートはしでかすが、アルドはみている感じがした。

うれしそうな顔をして、笑っていた。

フィートといると、なんだかうれしそうだった。

そしてフィートが帰っていくと、なんだか寂しそうだった。

純情である恋、というものを感じた。

神の恋とはすなわち義務であった。

世界崩壊を防ぐための恋。

彼らはそれをぶち壊し、今現在、楽しむ自由な恋をしていた。

いいなあ、とアルドは思った。

そして彼らは相思相愛とし、交わり

子をなし、

そして幸せといえる時をすごす。

そんなもの

不変の権力という古来の掟に心を侵食されたものにとつて邪魔ではない

壊された。

彼らの幸せは。

いとも簡単に

フィートの玉座の中

フィートの悲しい叫びだけが響き渡る。

第二十四話『引き裂かれる、二人』（後書き）

神のシステム…禁忌

人間という下等生物と位置づけられたものに対する嫌悪による、人と交わることの禁止。

セッ・・・とかはさすがに全年齢対象なので、控えることにしました。

わからないってひといろかな？

ちょっと不安ですね。

第二十五話『決意する、思い』（前書き）

ワシ、基本ギャク小説しか読まんし

稟「この小説のギャグは俺には笑えないんだよ!？」

俺がよければ、それでいい。

稟「すげえ、最低なことを普通にいいやがった。」

第二十五話『決意する、思い』

神の会議。

やることないけどやらなただけマシという会議。

その中で統一神は、呆然とする。

禁忌に触れた人間に対する罰。

それが議題。

「な・・・んだ・・・と。」

神たちは刺激を感じ、たのしそうににやけている。

「(・・・腐ってやがる!)」

フィートはそう思った。

『えーさて・・・今回の議題は・・・』

読み上げる、審判の神。

そう、楽しそうに

ああ、暇という地獄から一時期でも抜け出せるという快樂。

苦痛、苦痛、苦痛。

そんな毎日からすこしでも抜け出せるという名の快樂

そこは、反吐がでるほど興奮に包まれ

フィートはそれを感じ、怒りを感じる。

「古来からの掟——」

そんな言葉が飛び交う。

その中でフィートは叫ぶ。

「ふざけるなっ！」

静まり返る、議會

「古来の掟をしろ！お前らが糞つまらないものばかりではないか！
だったら何故、改変しようとしない！」

「古来の掟は絶対です。」

「絶対だど?! そんなもの、全員一致で変えればいいだけじゃない

か！」

「絶対です。」

「っ……」

絶対的変化など許さぬとの意志……などではない。

これは、ただ目の前にある楽しさを逃さないがための、意志。

「（本当に……腐ってやがる……!）」

楽しい、快樂、悅樂、すべての神は眼が死んでいる。

「ふ……ざけるなあっ!！」

「おい、統一神といえどもいけないなあ？」

いけない。

なにがいけない？

なにがいけないんだよ？

「人の変革……それすらないこの神の世界はなんなんだっ!？」

「なにをいつているんだね？変革など、いらなではないか。」

神が、笑う、全員ではない、いる十数人は笑っていない。

すべての人間は、俺の言葉に対し笑っていない、いま目の前にある
楽しみに対し笑っている。

俺の言葉は正しい、だが目の前にある悦楽にすべての気がいつてしまっている。

「いい加減にしたまえよ、統一神・・・君は強制退出だ。」

「な・・・うぐうつ!?・・・放せ・・・放せ!」

叫び、無意味。

無力に統一神は涙する。

統一神は連れて行かれ

風見・・・イリスは地獄の獄へとつれていかれる。

会えない。

もう会えない。

魂だけの存在が、死ぬことはない。

地獄の獄は、生まれ変わることすら許さない。

永遠の獄。永遠の地獄。

イリスは最後、フィートにこういった。

決意する。

「神を人間の力でつぶしてやる・・・！」

怒りではない、いまはとてつもなく冷静だ。

「革命だ・・・！」

彼らがあんな下劣な笑いと興奮をもったのは何故だ。

今のこの世界であろう！

ならば・・・

俺は、神の世界に革命を起こしてやる。

すべてを変えてやろう。

そして俺は・・・

この腐った神の世界を、人間の力でねじ伏せてやる。

フィートの眼の中の光は、いつきに燃え上がり

フィートは抱きかかえる自分の子を見て、微笑む。

さっきまで、不安そうにフィートをみていたその子は、笑っている。

「ああ・・・お前もそう思うだろ、リリース。」

フィートは自らのマントを着て、そのマントを歩くたびに起こる風
にたなびかせ、玉座から外へと歩き出す。

アルドを呼ぼう

この子を人間の世界へと落とす。

うらまれようとも、俺が何も得られぬとも

俺は、この子が望む限り、この子の幸せが続くならば。

俺

は、革命を起こす

この子が母とともに笑ってくれるように

第二十五話『決意する、思い』（後書き）

・・・

ごめんなさい

どっちにしろ革命を起こすことを決意するんですけど

そこからどうするかまったく考えてないんですよ

ふっ・・・ちよ、いたい！やめて！石を投げないで！

ふう・・・

革命について勉強することになりますかね。

俺、理系だけだね。

第二十六話『拭う涙と移り行く闘志』（前書き）

・・・なんかしらないけどお気に入りがびみように増えてるよ。
もしかして過去編好評？現代いらない？

稟「ちょっとまってくれよ！俺これからなんだよ！」

ワシ、革命とかあんましらんし

稟「またそれかよ！どうするんだよお前！」

第二十六話『拭う涙と移り行く闘志』

気がつけば朝日が出る。

もうすでに一日が過ぎる。

とても、すがすがしい気持ちであった。

それでいて、心はとても温かかった。

見回せば、隣に天使がいて、寝息をたてている。

・・・こいつらも、家族。

なんだか、うれしくて・・・

それにより、さらに俺の心は目標を打ち出す。

このうれしさを、母にも。

そういう、願い。

「ん・・・むう・・・」

「んにゃ・・・」

「起こしちゃったか？」

「いえ・・・起きなければいけないことがありましたから。」

「ん・・・？なんだ？」

そういうと、咲と瑠璃はまっすぐ俺を見る。

顔が近い、俺はちょっと離れることにする。

「・・・では、統一神より一言です。『お前は母の笑顔をみたいか』
・・・だそうです。」

それをきいて、なんともバカらしいと俺は笑った。

「ククク・・・ハハハハ！なにをいつているんだ。」

俺は、口に出す。

俺の思いを

おれ自身のきめたものを

「俺がみたいのは、『家族の笑顔だ。』」

そうきいて、咲と瑠璃は、優しい笑みをみせる。

なんとも楽しげに、笑い。

「がんばってください。」

「がんばってね！神様！」

「あぁっ。」

俺はうなづき、それをみた天使は満足そうに帰っていく。

「本当にバカな親父だ。」

そういうと、笑いが込み上げてくる。

「ハハハハッ！フハハハハハ　「うるっさいんだよボケエツ！」
・
・
ごめんなさい。」

姉のスリッパがジャストミートした。

・
・
ごめんなさい。

第二十六話『拭う涙と移り行く闘志』（後書き）

たぶん、更新が遅れるだろうな・・・

本編みたいなもんだし、これから。

といってもかわらないと思う。

次回もしくはその次の回は、百合子とともに映画をみにいく回です。

何故そのようないいかたかは、あれです。

次、番外編いれようかなあって思っているんです。

ぶっちゃけ稟、ここから肉体攻撃が減ると思っているんなら大間違いだ。

三倍になる。

稟「ええ！？死ぬよ俺！？」

・・・知るか。

番外編『やっちゃまったと思ってる。』（前書き）

ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっ

革命についてまったく考えが思いつきません！
たあすけてくださあい！

番外編『やっちゃまったと思ってる。』

・
・
・

・
・
・
・
・

「俺が見たいのは『家族の笑顔』だ。」

そういった自らの子供にフィートは笑った。

「くつくつく・・・！さすが我が子供。」

そういつて壇上で笑いながら手足をばたつかせ。

すぐに、自らの頬をつたっていく温かい水に気がつき。

それを感じてしまったせいで、止まらない涙があふれ出てきて。

声を抑えられずに、なき始める。

よかった、よかったと思った。

自らの子の成長と、自らの意思を告ぐ考えを出してくれて。

うれしくて、うれしくて。

玉座の中、声を抑えようともせずに、泣きつづけた。

真実の神、アルド。

入っていいこうとしたときに声が聞こえ、よかったですね、と思い、涙する。

中で「ぐすっ」という音がして、泣く声が弱まったから、ゆっくりとはいっていいこうとする。

なっているのをみられるのは恥ずかしいだろうから、しらないように。

「だがあと993人だな。」

・・・アルドは悟ったようにフツと笑うと、いつきに駆け出し。

「またそのオチかああああっ！」

ツツコンだ。

いつもどおりに二人はじゃれあったのである。
親友。

番外編『やっちゃまったと思ってる。』（後書き）

・・・この二人のとき、オチってだいたい同じになるよね

第二十七話『大切な』（前書き）

ついでに、更新が遅れたのは葬式にいったから。

昨日言うべきだったなと思っている。後悔するほどのことじゃないが
そういえば、この小説男性比がもうすぐ1割以下ですね。

うわー

稟「お前のつくっている物語だろうか!？」

第二十七話『大切な』

百合子と映画

まさに、至福！・・・とまではいかないものの、家の喧騒というか、やかましきからはすこしはずれて俺は百合子と映画をみにきていた。たぶんこの約束は19話か20話でやってると思う、違ったときはしない。

「ふう・・・今日はいいい天気でよかった、雨のときの映画館は最悪だからな。」

百合子が空を見上げてそういった。

「ああ、まあ雨の匂いというか、それが充満するし、なんかムシムシするからな。」

「まったくもって、その通りだな・・・暑い日の雨以上に嫌いだ。」
いつもどおりの話、この程度の話でもなんだか盛り上がるのが俺たち、幼馴染であり親友である。

すぐに映画館につき、俺は「（やはり男だからおごるくらいの誠意をみせねば）」と思い、はりきってチケットを買いに行く。

買うとき、俺が全額払う的なのをいうことが大好きである、小さい男かもしれないが大好きなんだよ！悪いかよ！

「じゃゝなにをみr 「ああ、チケットならここにあるぞ」・・・
そうですか。」

・・・なんて用意周到な人だ。しかも今日限りのチケットじゃないか。

少なくとも今は10時だ、映画館の開館は9時、つまりあれだ。

今日俺がダメだったらどうなっていたんだろう？

チケットをみると、ちょっとおかしい。

「あれ？アニメじゃなくて恋あぐほおっ！？お前！？今ゲホオツ、
鳩尾を！？」

正確に着くなんてさすがチャンプ・・・じゃねえ！

「なんでお前今鳩尾を！？俺、恋あ いったあい！？」

鳩尾二連発をくらって吐きそうになる俺。

なんで、こんなに理不尽なんだい？

「ぐふ・・・うう・・・」

腹を押さえてうずくまる俺をひきずっていく百合子。

さながら俺達是这样みえているだろう。

『ご主人様とペット』

『力による服従』

まさに狂気。

そして始まるのは恋愛映画。

こんなものをボクシングチャンプが見ていることに驚きを隠せない、嘘だ、お願いだ、俺の腕をギリギリと締め付けないでくれ百合子

折れますから、折れます！？逝っちゃいますよ！？

映画も終わり、百合子をみると、眼を真っ赤にしていた。

「・・・泣いていた 「泣いてない」

・・・なんだろうな、俺の周りのやつは、まったくみんな素直じゃない。

慣れてしまったよ。

「そうか、もう昼だし、どっか喰いにいくか？」

「うん。」

そういつて俺達は映画館から出る。

こいつは、大切な友人であり、幼馴染であり、親友であり。

大切な・・・

第二十七話『大切な』（後書き）

・・・・・・・・・・ネタがないから無理矢理つくった。

やっべえ W W W つまん n 「死にたいのか？」ごめんなさい百合子さん

百合子「そうか死にたいのか、死にたいならいえばいいのにいくらでも死んでしまえばいいのに、フハハ！フハッハッハ！」

眼が病んでやがる！稟！どこだ！？

第二十八話『革命とは』説明だけです。（前書き）

よくわからないこの世界の説明（

この世界での予知とは。

世界に流れている時を自然に感じ取り、脳内でいつ何時か設定され、見ることになっております。

原理自体はこの世界でも不確定というか、まあ設定されていませんね。

一部では、時の神がすくなく干渉し、楽しみとしているという設定もあります。

第二十八話『革命とは』説明だけです。

次の日、IN図書館。

いきなり日数が加速しはじめたとかいうのは勘違い

6日目の日、俺は今図書館に居る。

【革命】

被支配階級が時の支配階級を倒して政治権力を握り、政治・経済・社会体制を根本的に変革すること。フランス革命・ロシア革命など。

Yahoo辞書より

俺が人間の立場となり、人間の方法で革命を起こす。

それが俺の『革命』

俺の考えた『革命』による改変は小さい。

『他のものを基準として良いことか悪いことか、そしてどのくらい大きく良いことか、どのくらい悪いことかを定める』

神の世界には格差はないが、神の世界の神と呼べるものがある。

三人の最高神。

過去と現在と未来を作り出す神。

全てを知り尽くした神

そして物質すべてを作り出し、安定させる神。

格差はあるようだ、だが、基本的にはないことになっている。

まあ、男女平等っていう日本よりも曖昧だといえる。

すこし心配なものもある。

『格差』や、『基準』をつくりだしたことで、『争い』というものが生まれないかどうか。

いわば、戦争は『格差』によって生まれていると俺は思っている。

『隣の国は私たちより弱いため、勝てるであろう』という理由

『強いから俺たちを虐げている、もう我慢の限界だ』という理由

いずれをとっても、格差、差というものは争いなどに通じる。

喧嘩にしても、かけっこにしても、争いだし、それも人間の『差』を気にする心によって、相手に怒りや妬みを感じるであろう。

・・・俺は、この問題をどうにかできるか。

格差がないからこそ、妬みがなかった神の世界に

『革命』をして

そして、純白すぎたこの世界を灰色にするのだ。

これは本当にいいことなのか。

変えなければと思い、決心したが、この問題を解決しないかぎり何も変わらない。

『母さん』を救う手立ても未だにできあがっていない。

「こりゃあ・・・複雑だな。」

のこり25日。

朝十時三十分

図書館から出て俺は家へと向かう。

三人寄れば文殊の知恵・・・だったかな。

人間の教えを使ってやろう。

第二十八話『革命とは』説明だけです。（後書き）

ここからどうするよ・・・

なにをやるうといったものがないよ・・・

学校辞めさせたのをいまさら後悔しているよ・・・

うわあああああああ！

稟「ちょ、落ち着け、まだだ、まだ終わらんよ。」

うおおお！まだ吉野姉妹とのからみをやっていなかった！

稟「ええ！？やるの！？姉と妹だよ？ちょっと自重をしていただきたいような気もする・・・」

うるせえ黙れ、俺に操られてろ

稟「主人公がいなきゃ物語ができないだろうが。」

この世界観で、今現在最もえらいのは誰か？それは・・・瑠璃だ。

稟「あれ？なんか変な言葉が聞こえたような・・・。」

瑠璃・・・なんだよ・・・

稟「・・・そうなのか・・・」

怖いんだも　瑠璃「なんかいった？」ごめんなさい！姉御！

瑠璃「ん？姉御お？ちよつとついてきてね、あの建物の影までいいから。」

稟「・・・；」

第二十九話『友と共に』前編（前書き）

駄洒落じゃないよ、とだけいっておきたい。

今回は友達視点としてこのカオスな家庭をみせる、という話ですかね。

第二十九話『友と共に』前編

そういえば・・・で始まる話だ。

俺の名前は『三村高貴』、高校二年の少年だ。

高校生って、少年だか青年だか、よくわからない年だ。

今回は俺の友達の話をしていきたい。

『吉野 稟』俺の友達。

ここ最近、学校に来ていない。

百合子に聞いたところ、稟は学校にやめているといった。

・・・そんな話聞いたことない。

なんなんだろうか？

・・・というわけで、学校が終わった後やってきました。

吉野稟の家！

姉妹が超美人さんなんだよなあ、・・・違うよ？姉妹目当てじゃないよ？ボクハリンノオトモダチ

とり・・・あえず。

ピンポンとインターホンを押して、鳴らす。

『・・・はい。』

「あ・・・稟くんのお友達ですが。」

・・・あれ？姉妹でもあいつの両親でもない声が聞こえる。

表札をみても、『吉野』だ。

庭が変わったこともない。

ならば、引越しではなさそうである。

『あ・・・そうですか、稟を読んで参りますね。』

丁寧な声、澄んだ声。美人さんかな、と考えていたら、ドアがあく。

「お・・・高貴じゃないか。」

稟がやってきたので、俺は手をヒラヒラさせて合図する。

「よ！なんか学校こないなあって思ってたら百合子が、学校辞めたっていうからさあ、ちよつと見に来たぜ！」

「おう・・・家にあ・・・がるな。」

「なにそのフェイント！？・・・っていうか、さっきの声誰だ？」

そういうと、稟はギクツとした顔になる。

「・・・ボクシラナイ」

「嘘付け。」

「うお！ちょっと用事思い出した〜グッバイ！」

わざとらしく、ないくせに時計をみるような感じで右腕をバツとみて、ドアを閉めようとする。

そのドアにスライディングで足を滑り込ませて、俺はニヤリと笑ってスキマに両手をもっていき、こじ開けようとする。

「ちょ！てめえ！やめろおおお！」

「フハハ！おもしろそうなことを俺が逃すと思うのか！？」

「ああ！お前はそんなやつだ！・・・よし、るるり」

瑠璃？誰だそれは。姉妹以外に女がいるだと？

許せん、成敗だ！

「貴様、美人姉妹にはあきも」「お湯持ってきて〜！」　ごめんなさい！つかお湯！？それで何するつもり！？」

「どうせなら、鉄の棒を火あぶりにしてもってきてくれ〜！」

「やめてっ！俺は奴隷かなんかか！？」

ちつくしょう！こいつは俺をどうするつもりだ！

「・・・ふっ。」

なんだこの悟ったような笑みは！なんか怖いよ！？

「・・・ふふっ。」

怖い！！

「クフフフフ。」

怖いが・・・理由を聞かずにもってきてくる女がいるものか。

無理矢理こじ開けて・・・

「もってきたよー神様〜！」

What！？今なんと！？

も っ て き た だ と

「よし・・・コイツの足をつかんでくれ。」

「うん！」

・・・嘘・・・だよな？

なんか足にちよつと生暖かい空気がついてるけど・・・嘘だよね？

「あじいじいじいじいじいじいじいじいじいじいじいじい！」

6日目、夕方。

ある住宅街で叫び声が聞こえたという。

第三十話『友と共に』後編（前書き）

なんか知らないけど30話までやってるよなこの話。
このサイト内でも結構な速さで投稿してる気もする。

人気あんまないけどね。

第三十話『友と共に』後編

（前編のあらすじ）

オッス、俺『三村高貴』っていうんだ。

いま、白目をむいて気絶をしてるやつだぜ☆

友達はこの話の主人公でもある『吉野稟』、最近学校こないなあと思ってたら、あいつの幼馴染である百合子が「学校やめた」とかいうびっくりな話をしたので、様子をみにきたんだ！

そしてあいつの家に来て、応対したらお湯をかけられて気絶したんだ！

「ちょっとまで、俺が確実に悪者じゃないか？」

「いや、悪者だろが・・・」

「ん・・・」

少しばかり意識がもどったらしい、目の前を空けると光がみえる。

電気をつけてないところを見ると、まだ気絶してからそんなになっ

ていないと思う。

数日とかいうふざけた気絶時間をのぞけば・・・だが。

「・・・おきやがったか・・・」

稟の声が聞こえる。それはある意味いやそうに聞こえる。何故だ？

俺はゆっくりと体を起こし、眼をあける。

———天使が居た。

「どうしよう、俺、友達の性癖についてなにかいいたくないけど、思わずポロッといっちゃいそうだよ、天使コス？天使コスなのか？やばくね？こいつやばくねえ？と言いたいけど、友達のことを思っ
てなにもいわない高貴であった」

「いつてるいつてる。ついでにこいつらは天使コスじゃない、天使だ！」

・・・ふう、そこまで逝っちまったか。

「さて、真実だぞ、俺がいつているのは、こいつらは天使だ。」

「天使の瑠璃でーっす！」

「・・・咲と申します。」

「ふっ・・・かりにそうだとってもお前の運命は変わらないんだよ
お・・・！」

稟は、はあ？なんのことだ？とでもいいたげに俺をみている。

「姉妹にあきたらずううう！美人二人をおお！」

「おい、稟・・・牛乳ねえぞ。」

「あ・・・ルベリア」

なん・・・だと？グラマーなお姉さんまでいる・・・だとお？

「どうしたんですかぁ？騒がしいですよ？」

・・・さらに増える美人や美少女。

「ふう・・・うるさいなあ。」

「なにやってるの？お兄ちゃん。」

増えてゆく。

女性。

「・・・ふっ。」

「ど・・・どうした？」

「コ
ロ
ス
ッ
！」

素晴らしく響き渡る俺の怒りの言葉。

「クキキキキキッ！」

「なんだこいつ！気持ち悪い！」

四つんばいになって稟を襲おうとする体制になると、ルベリアといった女性からいわれる。

高貴に92のダメージ！

高貴 HP 210／302

「稟、こいつ誰だっけ？」

明さんの一撃！俺自己紹介したのに！

高貴に42のダメージ！

高貴 HP 168／302

「で、稟、今日のご飯はなんですか。」

俺の存在は何よ！？

高貴に180のダメージ！

高貴 HP 0／302

やめて！高貴のライフはもう0よっ！

「気持ち悪いんだよゴミ。」

あれ！？君純情そうな人だったよね？ピンクのツインテールの娘さん！？

高貴に201のダメージ！

高貴 HP 0／302

「…………ぐふっ。」

「ど、どうした高貴？」

「ありがとよう……稟……お前が原因でも……心配されることはうれしいことさ。」

「いや、お前本当におかしいぞ……」

稟……ありがと……

「高貴iiiiiii-」

「どこに捨てておこう？」

一番ひどいのは俺の友達でした。

第三十話『友と共に』後編（後書き）

・・・今後こいつは話にでてきません。

本当に俺、なにがやりたかったんだろう。

次回は七日目ってところ

やっ和一週間・・・。

第三十一話『いまさらだけど、神崇拝って俺の親を崇拝しているんだな。』

(前)

わーい！七日目だあゝっ

といってもネタは即座に考えだいたいノリでやってる感じがいなめな
い。

なんかネタない？異世界に飛ばされるとかそんなの以外で・・・

第三十一話『いまさらだけど、神崇拝って俺の親を崇拝しているんだな。』

朝・・・。

朝食を作り終え、のんびりと茶をすすり、起きるのを待っていたところ、全員降りてくる。

「ようつす。」

ルベリアとエリサはなんで帰らないのだろうか？

すっごいいまさらだけど気になったので聞いてみる。

「あの・・・どうして帰らないんですか？」

「ああ？」

「ごめんなさい。」

俺はやはり弱者だよ

朝食を始める。

「納豆く納豆くみいの納豆く」

「……なにをうたっているんだ。」

「納豆の歌、作者俺、歌俺。納豆こそ至高だと思わないかい？」

「いや知らないよ。」

「なにをいつているんだい、納豆は神を凌駕しているのだよ。」

「意味わかんないぞ！？つか誰も驚かないのか！？こいつのはっ
ちゃけっぷりを！？」

「ルベリアさん……」

「む……才……。」

「いまさらです。」

「……」

啞然としているルベリアがおりましたがどうでもE。

「ひゃっふう！納豆！NATTO！MIいいTOの納豆！イエ
イエイ！」

「ダメだこいつ……早く何とかしないと」

「といっても、ある意味この状態のお兄ちゃん是最強ですよ？」

「最強？どういうことだ？」

「鉄の板あったらわかりますが？」

「あるぞ。」

ひよいと鉄の板を渡してみる。

「・・・何故あるかは聞きませんよ。」

「そういつてくれると助かる。・・・というか厚さ3センチもある板だが、それを折ったりするのかわ？」

「違います。」

「ん？まあさすがにできるわけがないだろうな」

「いえ・・・お兄ちゃん、この板をもつて」

「なつと・・・なんだよ？仕方ないな・・・」

「で・・・両方をもつててください。」

「・・・？」

ルベリアはわけが分からないといった表情で才と稟の両方をみる。

「お兄ちゃん、近所の人が納豆まずいっていったよ・・・」

「ダレガイッタ、ハケ」

メキイツ、 balan balan、ガツチャン。『板よ、ばらばらになって

しまうとは情けない。』

「……は……？」

「私もここまでは知らなかったデスガ……。」

「こうなります。」

「……神の力を使わずにここまでって何者なんだこいつは。」

「納豆大魔神です。」

そんなこんなで平和な朝がはじまるのだ。

第三十一話『いまさらだけど、神崇拝って俺の親を崇拝しているんだな。』

(後

稟の納豆狂いで十話ぐらいかけそうな気がしてきた。

番外編『母の、想い』（前書き）

これやったら更新とまる。

なんていうか、あれだ。

ネタが一個もない・・・！

ないないいつてきたけど、今回は本当に思いつかない・・・！

番外編『母の、想い』

人間の制度と同じものが少しばかりある。

地獄の獄門では、手紙のやりとりが可能となる。

その中で、稟の母、『風見』は疲弊しながらも生きていた。

その顔には、たくさんのうれしさと、少しばかりの不安。

その顔は、フィートの手紙からでてきたものだ。

最初の一文は、あせったかのように書いていた。

その文字には、焦りと歓喜が読み取れ、手紙はすこしふやけていた。

フィートの涙であろう。

そして一文をみて、その涙の真相がわかり、風見は涙する。

『リリスが革命を起こすことを決心した。彼はこういった。

家族の笑顔をみる、と。』

「リリス・・・っ！」

風見は、彼の喜びを感じ取り、クスリと笑う。

だが、その眼からはたまらず涙が流れていく。

我が子が愛しい。

風見は、稟・・・いや、リリスの母として、そう感じたという。

彼女しか居ない監獄には、

うれしそうに涙する女性が居た。

『我が子の無事を信じて。』

そして、頬に手紙を近づけ、愛した人の想いを感じた。

『家族』、そこには、どんなに離れ離れになっても壊れない。

硬い『家族の絆』があったという。

番外編『母の、想い』（後書き）

ふう・・・なんででしょうか？

無理矢理コメディーっぽく書くより、俺はこっちのほうが慣れている気がします。

もうスラスラかける・・・気がする。
ちょ、文字数少ないとかいわないで。

第三十二話『むしろ殺して欲しい修行風景』（前書き）

・ ・ ・ここまでやりすぎて誤字を確認するのも一苦勞ですな。

・ ・ ・みつけた人はいってください。

第三十二話『むしろ殺して欲しい修行風景』

・・・俺が強くなったことは覚えてるかな☆

まあ、知ってるやつは知っているだろうが、俺は戦女神たちと修行した。

別次元の一年間。

実際この世界を構築している神（作者）は、『なんだかおもしろそうだったから』でやったんだけどさ。

そのせいで、俺は『力を安定させるための修行』をやることとなる。
そのことを俺はつづつていこうと思う。

俺は思うのさ・・・ダレカタスケテと

修行風景くモウイヤタスケテく

「さて♪今日もやりますか☆」

エリサ、『ピー！』歳である女性が、スイッチを押す。

そうすると、説明が『エ○ヤ○ロウの固有結界』の世界が現れる。

——そこは荒地

いうなれば、ドラゴンボールZでいう、ピッコ○さんと悟○の修行場といえればいいであろうか？

そんな場所が一瞬にして、俺の住んでいた世界を包み込む。

それは、別の世界が世界を喰うといっても過言ではない。

世界が塗りつぶされていくのだ。

世界が完全に塗りつぶされていくと、エリサとルベリアさんは徐々に笑みを出していく。

「ゲゲゲゲ・・・」

あの・・・エリサさん？その笑い方怖いですよ？

「そうですかぁ☆クケケケケケケ！」

なんだろうか・・・今すぐに逃げ出したい感情に囚われている。

大剣を取り出すエリサ、自分の背丈以上の斧を取り出すルベリア。

冷や汗が止まらない俺。

「さあて・・・いこうかぁ？」

ルベリアは絶対にSだと思う。

エリサは、Sとかいうところじゃない、ただの戦闘狂だ。

「GH（）（,H（&R）○F\$W#ッ！」

笑い声なの？笑い声なのかエリサさん！？

「うおおお！！オオオオONつつつつ！」

氷雨を取り出し、発動、

とたんに刀となりエリサの大剣から身を護る。

だが、武器からみても、その重量からして俺に完全にはうけきれぬ。

「うおおお！？」

吹き飛ばされる俺、なんとか空中でひねり体制を立て直そうとするが、すでにルベリアが目の前に。

いまさらだと思う。

『修行じゃなくてこれ・・・リンチだよね。』

そもそも打ち合っているのは力がイコール、もしくは、ある程度打ち合える程度じゃなければいけない。

エリサ一人ならいい、でもルベリアもあわせて二人。

つまり、俺以上×2である。

そうだな、数値としてあらわすと、ルベリアは10、エリサは6、俺が5だ。

つまり『16対5』、・・・相手にもならねえと判断する。

そしてこの荒地に、『異常なほど奇声を発する戦闘狂の天使』と『戦女神の称号を貰うほどの最強』、そして『その二人にリンチされる、次期統一神』の関係ができたのである。

「ダレカタスケテ・・・」

その中で、『次期統一神の叫び』と『意味のわからない笑い声』と『うれしそうに戦う女性の声』が響き渡ったのである。

よく生きてたと俺も思う。

ようやく終了し、俺はフラフラとこの世界から脱出するのであった。

けどね。

続く・・・続いてほしくない

第三十二話『むしろ殺して欲しい修行風景』（後書き）

そういや、日本語がおかしいかもしれません。

俺の場合、関西生まれの関東ぐらしなので、ごちゃまぜになってたりします。

よく近畿もいたりするので、さらにぐちゃぐちゃだと思えます。

第三十三話 『ネタを無理矢理作るため作り出した話です、みなくてもいい気が！』

誰でもいい、誰でもいいから俺にネタをくれええつ！

ONEGAI☆

第三十三話 『ネタを無理矢理作るため作り出した話です、みなくてもいい気が』

いまさらだ、すっごいいまさらなのだが。

俺って死ぬんだよね？

・・・ちよつと違う気もするが、人間の考えによる死と大差ないんだよね？

ならば、俺はアレだ。

『どうせなら人に役に立つ』

最後までそれをやってみようかなあ？と思う。

だが、なにをすればいいんだろうか？ 考えろ 『吉野稟』 お前は神だ。

統一神の息子だ、バカ親父とすんばらしい母の息子だぞ。

プラスマイナス0な気もするが、考えればなにか生まれるはず。

「よし、天使に聞こう。」

その間、わずか数秒となって諦めた。

「・・・人に役に立ちたいと？ バカなの？死ぬの？」

咲にいったら返答がこれだった。

「あのですね、貴方は神です、私は天使です。天に使うものと書いて天使です。」

いや・・・そうはいうが咲・・・ちょっとそれは変だ。

「・・・いや、貴方たち私にとって利益あることをしたこと
みさまあ？ なんかいいましたあ？」 ごめんなさい」

どうしよう、最近瑠璃に逆らえない。

「ふう・・・では、もう一度。正直人を救うのはいいと思います
が、こちらとしてはなるべくして危険なことにならないほうがいい

わけです。使える身にも「いや、本当に君ら俺に」あーあー、聞こえません。というわけになってくださいというわけですよ。」

だめだ・・・こいつら・・・人の話を聞く気も無いし、俺の事をいつかなる上司とも思っちゃ居ない。

人よりも使える気がない。

どんなに寂れた貴族であっても、仕える人はその子供を大切にしようとするはずだが・・・

「人と私たちは違うので。」といわれて逃げられるのがオチであろう。

「しかし・・・軽いものならいいだろう？俺強くなったし。」

「ダンプに引かれて死に掛ける程度がなにをほざきますか。」

咲・・・君、少しずつ黒く染まってないかな？勘違いならごめんよ。

というかお前はダンプに引かれても死に掛けないの？人型であることすら疑問に思い始めるよ？

「ぶっちゃけていうなら手足拘束して一ヶ月放置してもいいんですけど、革命という名の命運がありますから。」

命運って俺に選択権はあったよな？・・・あったよね？

「とりあえず、死なないならいいんじゃない？」

ルベリアが助け船を出してくれ・・・た気がしない。なんだろう、俺の人として存在がどうでもいいといった感じた。

「チキショーなんだこいつら鬼畜だらけじゃないか。」

「私たちは天使ですよ。」

「その返答がとてつもなくおかしいと思うのだが。」

「稟、おかしいなお前。」

「神様、おかしいねっ！」

「おかしいですネ稟。」

畜生！ルベリア&瑠璃&咲のコンビは俺にとって鬼畜でしかないっ！

「とりあえず結論からして死ななければいいわけですね？」

「そうです。人を救いたいといっても、この平和な日本ではろくなことはできませんし・・・それでもやりたいというなれば、私を絶対においてください、私を。」

「う・・・うん。」

なんで咲は自分を強調しているのだろうか。

普通私たちだと思っただけけれど。

「わ・・・わかりましたねっ！」

「いや、わかったよ。二人のうちどちらか「私です。」・・・はい。」

・・・いやまてよ、俺の天才的頭脳から考えるに、アレだ。

瑠璃の魔王降臨か。あれはきつついよな。

たぶん瑠璃ならダンプが突っ込んでも、「邪魔」っていつて平手打ちで吹き飛ばしそうな気がする・・・

「とりあえず、うん、俺は一回でもいい、人を助けたい。」

「そうか、私の修行を受けたのだからな、存分に助けよ。」

「はい、ルベリアありがとな。」

続く。続きかけない。

第三十三話 『ネタを無理矢理作るため作り出した話です、みなくてもいい気が』

俺、疲れてるのかな。

なんか知らないけどいつの間にか聞き覚えがある言葉がでてくるのだが。

というか、今回話として出来上がってないよね？

まあいいです。今回は人助けと言う『イベント』があっても、別におかしくないように創られた話ですし・・・

再度キャラクター紹介　ちょっと多いので人間編（前書き）

はつきりいつていいかい？

もう次の話で『一カ月後・・・』とか書いていいかな？って聞くぐらい切羽詰ってる。

再度キャラクター紹介 ちょっと多いので人間編

『吉野 稟』（設定上高校二年）

体質は半神半人、どっかの聖杯戦争にでてこれそうな体質である。

通常性格『ちょっと普通の道とはかけ離れた子』

納豆がかかると『ありえない奇人』

納豆がかかると、神気を使わずに鉄を砕くギャグ体質。

たぶん納豆化でf a t eとかでるとバーサーカーとして召喚されると思う。

修行後、能力がさらにあがったので、描写はされずとも、たぶん戦車は破壊できるぐらいになると思われる。

好きなもの…納豆、めかぶ、もずく

嫌いなもの…とくになし。

f a t e的な数値に直すと、無駄に行を稼ぐことになると思う。てかめんどい。だから適当。

武器は氷雨。ONによる武器化できるキーホルダー。絶対に壊れない術式が組み込まれている。

能力的には初期ならば納豆大魔神化しても、セイバーで抑えこめられるレベル。

でも、今現在は多分バーサーカーさえ無理だと思う。そんなチートな能力。

スキルは正直一つ『全能』

『人体構造、人体の理解、神気による自然治癒力の増加、および治癒』

『神気による筋力UP』（大魔神になってこれを使ったら世界が滅びます）

『気』（といっても飛ぶとかそういうことは無理、大気による理解で、変化方法を理解させれば飛べは出来る）

『剣術理解による使用可能』

『体術理解による使用可能』

『武器の強化』

『料理の才能』（理解によるもの）

『吉野 明』（設定上大学1年）

正直いたってノーマル。ちょっかい出すのが好きなのがある。

人間として普通な感じ。でもブラコンである。明の友人たちもあきれ返るほどに。

容姿は美人であり大人っぽい。スタイルは平均からみれば拔群といえる。

咲が着てからある意味自信がなくなってきた。

料理の才能は0

はっきり言えば、頭は良く、キレがある。

観察力も高いといった能力が設定上あるが、この作品内ではいまだ出てきたことはない。

髪型はちょっと赤い茶髪といった感じのショート

『吉野 才』（設定上 中学二年）

ブラコンではないが、家族は大切なものと考えている。

クールだが、褒められると素直にうれしそうに笑う。

運動神経が高いといった設定があるが、描写は未だにない。

県大会では3位くらいといった程度で、百合子のチャンピオンの称号により、正直目立っては居ない。

陸上部所属。

髪型は黒髪のサイドテールといったところ。
ストレートも良く使う。

俺は、正直黒髪で美人って思える人が一番美人な人だと思っている。

『百合子』（ちなみに苗字はあるよ、でも出さなくてもどうでもいいといった感じだから書かなくていい気がする）

ついでに主人公と同じ年齢。

ボクシングの学生チャンピオン。

主人公の幼馴染で、主人公によりボクシングを目指し始めたが、その話はまた今度。

クールで男言葉に近い口調ではなす。

ぶっちゃけていうと主人公が好きです。

髪型はポニーテール。

・・・ぶっちゃけていうと俺の趣味でこうなりました。

『三村高貴』ぶっちゃけどうでもいいやつ。

稟の友達、ハイ終了

再度キャラクター紹介 神編＋α（稟母）（前書き）

どうせならゼロ魔のSS書いてみたい。

カオスヘッドのタクとか主人公にして。

「な・・・なんだよこれ・・・」とかいっているのを見たい。

・・・デルフの存在価値がなくなるな。ディソードあるしね。

「この剣はとても軽い・・・だから殴られてもあまり痛くない・・・」

という想像で勝てそうですね。なにもかも。

再度キャラクター紹介 神編＋α（稟母）

『フィート』（統一神）

稟の父親。ものごとに真剣であるが、だいたいはマイペースで、そのペースに巻き込む。

空気が読めない発言をするが、読めないわけではない。

読んでいるからこそ変な発言をしている。

稟には、バカなことをしているとかわれがちだが、そこには愛情があったりなかったりする。

ただたんにおちよくっているだけだったりする。

稟への愛情も、妻への愛も本物だといえる。

赤で長髪な髪型。

好きなもの…妻、妻との思い出、息子が元気にしている時間、妻の笑顔、妻の・・・etc。

嫌いなもの…欲により発生した感情

『風見』（イリス）

稟の母親。気高く優しく。ただ好きだという感情を信じ。いまを生きる。

思い出を思い出で終わらす気などない。

ただ、未来を信じる女性。

自分を愛し、自分が愛した男と、自らの子供と笑顔でいられる世界を信じ。

苦しそうな表情は見せずに、いつまでの優しく微笑む女性。

稟のもつ、諦めない心と、どんなものであろうと優しく接する力は彼女から受け継がれているといえる。

腰よりもすこし長い綺麗な神をもつ。

好きなもの…フィートと稟

嫌いなもの…諦めること

『アルド』（真実の神）

年齢は離れているが、フィートが親友だといえるほどに仲が良い。

フィートのマイペースに巻き込まれ、苦勞人だが、彼はフィートのペースを波のように感じ、それに乗る、サーフィンがごとく楽しんでいる。

事実子持ちの男である。フィートが『人間の世界へ行かせようぜ！』
といって妻と必死にとめた物語はまた今度

好きなもの…不明

嫌いなもの…不明

『咲』（統一神の天使）

現状、稟の補佐天使。年齢は14程度だが、明をうならせ自信喪失させるスタイルの持ち主。

金髪の長髪。ぶっちゃけていえばクーデレといえる部類だろう。すでにデレッデレであるが。

力強い敬語を話し、自身はポーカーフェイスだと信じているが、稟にはいつも調子を崩されっぱなし。

稟とフィートを見て、「ああ、似ているな・・・と思う」

色々過去の物語は考えているが、番外編連続になるので自重しようと思う。

好きなもの…ここに来てから食べた料理（稟の料理）

嫌いなもの…明がつくつたどす黒いなにか

『瑠璃』（大天使）↑これ、結構前から考えてた

見た目は幼く、話しかたも幼さを感じられるが、19歳。咲の姉である。

腹黒い・・・というか、大体気に入らないヤツには強く接する。

妹に近づく馬の骨は死んでもかまわないと思っている、ていうか死ねと思う。

別に妹より年下と思われてもかまわないが、馬の骨は殺す、ゼツタイニコロス

好きなもの…どっかの馬の骨以外

嫌いなもの…どっかの馬の骨

『ルベリア』（戦女神）

一騎当千の戦士。陽気で美人。この物語ブサイクってのがないよね
ちょっと赤い髪、大体フィートと同じ髪型で、それよりもすこし長
いくらい。

そうだな、ドラ○エの戦士・・・ってやつかな。

その髪を紅にして、さらに美人さんにして、そして鎧の面積を普通
の鎧程度にして。

それをレベル99より強くした感じ。

好きなもの..いや、別にないが。

嫌いなもの…心が弱いやつ。ただたんに弱いやつは嫌いではない。

『エリサ』（途中エリザになってたりすると思う、いつか探そうと思う。）

戦闘狂、おっとりしていると思うなよ。

戦闘に関して瞬時に判断することが出来る・・・どんだけ無残に殺すかを。

天使って神聖じゃなかったっけ？と思っていたら、たぶんあれだ。

その夢を一瞬にして打ち砕く。

髪型は薄い緑でショート。

いい加減もうちょっと凝った髪型の女性を出したいけど、なにも考えずに出した結果これ以上だせるか不安になってきた。

好きなもの…戦闘

嫌いなもの…歯ごたえがないやつ。

というか、描写で『歯ごたえ』って漫画ではよく言いますが。

俺はなんだか『手ごたえ』だと思ってました。どっちが正解なんでしょう？

再度キャラクター紹介 神編＋α（稟母）（後書き）

・・・キテレツをゼロ魔の世界に召喚したらたぶん産業発展がのぞめると思う。

稟「まだ続いていたのかよ!？」

第三十四話『なにをいつているのかな。君は。』（前書き）

岩井先生（女）

ハーレムには加わらないよ・・・おそらく多分・・・
多分・・・うん・・・

第三十四話『なにをいつているのかな。君は。』

始まりは、一つのインターフォン。ピンポーンとどこの家庭でも鳴るような音が家に響く。

時刻は夕方、高貴だったらお湯の準備だと思っていると、瑠璃は駆け出す。

「はーい！だれでしょうかあ？」

インターフォンに向かい、話している。

「え？あ、はーい。」

話しているのだが、こちらからはあまり聞こえない。

声的に大人であろう。・・・ダレだろうか？

まあどうせ宅配便だろう、と思って自分でいかず、瑠璃が走っているのを眺める。

玄関ではなしている。

「（ん・・・？知っている声だな。）」

その声にすこし反応する。それは聞き覚えがある声。リビングからでは聞こえづらい。

俺はソファから立ち上がり声へと足を運ぶ。

「私、吉井くんの担任の岩井と申しますが……。」

な……なんだってー！

俺は心の中でそう叫ぶ。

いやだって先生だぜ？先生。何故に？何故ここにきた？

「最近……学校にこないようで……。」

いや、まて、俺は退学届けをだしたはずだ……

「で……よくわからないこの退学届けがありまして、もしかしてこれが吉野君のものじゃないかと。」

いや……俺ですが。

俺は先生の前へと現れる。

「いや、俺ですけど……。」

頭をかきながら答える。

「おお、吉野君生きてましたか。」

「生きてましたかって・・・そもそも退学届けだしましたよね?」

「退学届け? シールがはいってましやけど。」

「は? シール?」

「これです。」

うさぎさんのしーるだあっ・・・まてや! 母さんはちゃんと「退学届け」っていったはず。

「ちょ・・・ちょっと待っててください。」

俺は母へと連絡するために全力で携帯へと走る。

ブーッブーッという音がした。いや、まさかかと思うけどね。

俺は携帯を開いて中身をみる。

『やっばい(笑) まちがえちった☆テヘッ。』

「なにがテヘッじゃヴォケエエエエエエッ!」

俺の声が響き渡る。

「うおおおおおっ！俺の親は全く！うあああっ！」

「あのー大丈夫ですか？」

岩井先生・・・普通の人っていいなあ・・・と俺は涙を流す。

「シールもらっていいですよ？大丈夫ですよ？」

・・・ああ、そっちですか。

「いいですよ・・・もう。」

「わーい！やったあっ！」

岩井先生（28歳／女）

「・・・もうすぐ三十路のくせに。」

「コロシマスヨ」

ひどい殺気が俺にぶち当たった。

「・・・というわけで・・・俺は退学したいのですが。」

「……」

「……」

無言が重なり合う。この人はズレたひとだと再認識をいまさつきしたところだが、さすがに神だといわれて信じるやつはいない……わけじゃないな。俺の周りがそんなのだらけだチクショー

「天使っていたんですね。」

「そこ！？そこですか！？」

「ほかになにをいうんですか？」

「いや、何をいつているんだとか言うべきじゃないですか？」

「いわれたいんですか？M？もしかして変態？」

「いや、言われたくないですよ！？でも、普通はいわないですかね！？」

「……普通というものは、事実ないんですよ。」

ヤバイ……この人は語り始めると止まらないタイプだ。

「普通というものは、『昔からあった』というものと同じだといえます。いまやコンロで火をだせ、料理をつくれるということを通じて普通といいますが、過去それは画期的なものだといえたでしょう。単純に考えれば包丁ですね、歴史的に石包丁というものがありますが、

それもその時代には、気づいて、画期的だと考えられてつくられたものなんです。つまり、普通とは『今では』というものが必ず入れるべきだと先生は考えます。はつきりいえば、そういう、『今は』という単語がはいらないからこそ、いまや現代人は『便利』ということに、感謝をもたないのです。『発明者』というものは天才です。私の知る中にも、何か画期的なものを・・・（中略）」

「もう・・・やめてください・・・」

「というわけで退学届けは無効となります。」

「はい・・・ありがとうございました・・・」

先生はさっさといった

そして俺の学校登校が決まったのだった。

第三十五話『ある意味番外編』（前書き）

学校編やろうとして、数行で終わると思ったやつを書いてたら一話分くらいになったので、かけなくなった。

第三十五話『ある意味番外編』

「そういえば、統一神様からこれをいただきました。便利なものらしいですね。」

「便利？あの糞親父がそんなものをくれると思うか？ありえねえな。」

「さすがにそれはひどいと思うよ・・・神様。」

俺は三枚ほどのカードを貰う。

「カード？」

「使い方は氷雨と同じもので、物質が封印されているといった感じですね。」

「へえ・・・とりあえず見るか。」

『一枚目…馬』

「・・・」

「・・・」

「必要性が・・・まったく感じられない・・・」

『二枚目…大剣』

「・・・俺、日本刀の業を習得した男だぞ・・・、それ以上習えと？」

「・・・」

「そもそも大剣と日本刀って一緒にあわせて戦えないしね・・・」

「とりあえず、Onってやってキーホルダー化をしてくれるとうれしいです。」

「うん・・・」

キーホルダー化しました。

『三枚目…天使』

「・・・えっと・・・」

「これ以上女性率を増やせというのですか、統一神様は。」

「でも・・・よばないのもかわいそうじゃない？」

「それは・・・確かにそうですが・・・」

「それじゃあ、ON・・・」

ポオンツという音がして天使が現れる。

「はぁーい！お手伝い天使、ルリカでえーっす！」

「・・・お手伝い天使だって！？最高だなっ！って痛い！？なんで俺足踏まれているの！？」

「気のせいです。」

ルリカが仲間になった。

「キャラクター紹介を再度やったところだけど、増やして大丈夫なのか？」

「そういう現実的なことはルリカわかーんなぁーい！」

「現実逃避キャラって位置づけになりますね。」

現状（家にいる人）

男…稟

女…明、才、咲、瑠璃、ルベリア、エリサ、そしてルリカ

12.5%が男となりました。

「・・・男性率が少ないような・・・」

「では、この物語の主要の男性率をみてみましょうか。」

男…稟、稟父、フィート、アルド

女…才、明、稟母、咲、瑠璃、百合子、ルベリア、エリサ、風見、

ルリカ

「まさか・・・二倍以上とは・・・っ！」

「とてつもないですね。」

「30%以下というのもびっくりだよ。」

「そういえば・・・統一神様がいつてましたね。」

「はぁ、なんて？」

「ハーレム1000人でつきるっかな♪・・・と」

「俺の血の半分は・・・変態で出来ているのか・・・？」

「いや、びっくりすることでもないと思いますが。そもそも納豆大魔神とか呼ばれている人の父が変態でも正直ああそうですかといえませんか。」

「・・・ふっ。」

「かつこよくきめても無駄です。それはいわば血の運命です。」

「ていうか、ダレができるんだそんなハーレム。」

「某三国志エ○ゲの魏の種馬さんでも無理だと思いますが・・・」

「・・・は？いまなんと？」

「いや、なんでもないです。」

「いやいや、なんていったんだって。」

「う・・・うるさいですっ!」

首筋にアタック! 稟は気絶した!

咲は勝利した!

「とうか、咲、R18はやめなよ。」

「姉さん!?!」

第三十五話『ある意味番外編』（後書き）

・・・俺自重しますね。

第三十六話『学校より・・・神が行く』前編

「なんで俺にはニコツと笑って人を赤面させるスキルがないんだろ
う・・・」

「なにをいっているのですか稟は」

朝、朝である。憎き朝。

その朝は、G o t o s c h o o lという束縛された規則がある
朝。

こんなふざけた朝はみたことない・・・いや毎日だけど。

「でも、大体起きる時間は変わらない・・・なんだろう涙がでちゃ
う。」

「どしたのですか稟は。」

「いや、いまさらじゃないかな？」

こら、才・・・俺の乱心をいまさらとはなんだ。

「そうですね。」

いや、咲？同意しないでいただけるかな？

「学校行きたくない・・・」

「学校とは、学問の場所でしょう？ならばいくべきかと思います。作者のネタにもなるし。」

「現実的なものをださないでくれないかな。」

「まあ、事実学歴とかどうでもいいーけどさ。さすがにさよならぐらいはいつでも罰はあたらないと私は思う。」

「しかし姉さん、俺の友達なんて一握りだよ。百合子や健二くらいだし・・・」

今、ダレカの俺は？という心の声が聞こえた気がする。たしか高・・・まあいいや。

「健二・・・ってダレ？」

「姉さんは知らないけど、不良っぽい感じの人。」

「不良っぽいって・・・まあ稟が友達っていうならいい人なんだろうケド。」

「そうだね、不良のグループを200名くらい無傷で半殺しにした程度だよ。」

「それって程度っていえるのか!？」

姉さんが驚いている。というか健二には最近あっていない、どうしているだろうか。

「まあいいや、ごちそうさま・・・とりあえずいつてくるね。じゃー皿はつけておくか、洗っておくかしてね、・・・俺のために洗ってくれるとうれしいけど。」

「じゃーつけておく」

「洗いたくない。」

「つけておきますね。」

「がんばってねー！」

「とりあえず水につけておこう。」

「つけておきます」

「つけておくよ♪」

なんだろう、涙がでてきた。

というかお手伝い天使とかいってるやつ、洗えよ。

「というわけで、神、IN学校というわけです。」

「何をいつているんだ・・・というか何故いる。」

そういえば百合子にはいつてなかった気がする。

「いや、・・・ということがあってさ。」

「私は稟と心までつながってないからわからないぞ。」

「ふむ、ではなんといおうか、かくかk「普通に話せ」わかりました。」

「退学届けかと思ってたらシールでした。母から『間違えちゃった、テヘ☆』といったメールがきて、殺意がわきましたとき、めでたくなikedoめでたし。」

「・・・まったく意味がわからないのだが。」

「そう？とりあえず退学届けに母がまちがってシールいれてましたということさ。」

「・・・まあ君の母親だしな。」

なんだろう、納得されたことに驚けない。母親だし・・・ということにすごく同意できることに驚きだ。

「まあ、いっしょに勉強することになった。」

「ああ、またよろしくな・・・というか休学届けをだせばいいのじゃないか？退学に関しては無理っぽいけど。」

「・・・」

「気づかなかったのか・・・」

「百合子は俺のことわかっているんだろう？百合子はずっと一緒にいたんだろ？小さい頃から、幼馴染といえるくらいのことから！そんなやつが、俺を何故そんな白い眼で俺をみているんだよ！ずっと俺の周りはおかしいとしていたさ！俺の周りは普通じゃねえ！一般的なんて言葉がはいんねえって！神とかいわれて神とかいわれてさあ！お前はその目で、俺をずっとみてきたんだろが！ずっとずっと友達だったんだろ！毎日公園でいっしょに遊んだり、家でままたどするようになずっと一緒に幼馴染だったんだろ！だったら何故見る！そんな白い眼で！ちょっとぐらいのおちやめじゃないか！！まだ休める余地はあんだよ！いいかげん俺をそんな眼でみるなよ！百合子！」

「・・・おちついてくれ。」

そんなこんなで学校がはじまった。

第三十六話『学校より・・・神が行く』前編（後書き）

最後の稟の言葉を無理矢理つくることが一番キツかった。

やつと男キャラを稟父二人とアルド以外でだせる。

「ねえ！おれh さて・・・ん？なんか聞こえたかな？

第三十七話『学校より・・・神が行く』中編(前書き)

変更

第三十七話『学校より・・・神が行く』中編

昼休みになりました、たまに呼び出されて休んでたために説教をくらったが元気良く飯をくっている。

目の前にいるのは健二、こいつは唯一の男友d「俺は！？高貴だよ！？」・・・なんだ？文字数が増えてるぞ。

これがホラーってやつか！？「いや、いやいや、俺はどこにいるの！？別次元ってやつか？」

さて、はじまりはじまり。

「なあ・・・健二。」

「稟？なんでお前最近学校にこなかったんだ？」

「そうか、寂しかったか。」

「っ・・・んなわけねーよ。」

「男のツンデレは見苦しいぞ。」

「ツン・・・う・・・うるさい。」

「男にもててもなあ・・・」

「女にももててるじゃねーか。」

「女？」

「百合子さん。」

「・・・チャンピオン・・・だぜ？」

「それでも女だろ、・・・女、なのかな？」

ガンッ×2

「なあにをいつているのかな？稟？健二？」

「つ・・・あ。」

「マジ痛え・・・とりあえず飯を喰おうか！健二！」

「・・・お前なんか回復力が高くなってないか？撃たれ強さはもとからあったけど・・・」

「ふっ、俺は神となる男さ。」

「はいはい。」

あきれたようにいう健二、これが真実ということは彼は知らなかった。

「教える気もないけどな。」

「・・・？どうした。」

「いや・・・なんでも・・・ってアッーーーー！」

「・・・どうした。」

「べ・・・BEBEBE弁当♪わっすう「普通に言えよ」・・・弁当忘れた。」

「そうか、じゃー午後の授業持つぐらいやるよ・・・おにぎり一個と軽いおかずでな・・・というか最近っつーか今日だけど・・・お前壊れてないか？」

「・・・最近現実的じゃないことが現実にあってなれてきているからね。」

「苦労しているんだな。」

コイツはやっぱイイヤツだ

「まあ・・・いいさっ持ってきてくれるやつなんてい・・・るなあ。」

「・・・いるって、両親帰ってきてるのか？」

ちなみにこいつには俺の両親のことを話してある。

「主に美女と美少女がいる。」

「・・・？妄想・・・か。」

「さてよ！俺を危ない人にしたてあげるなよ！？」

「・・・さっきの会話で危くないっていう人がいるなら見てみたい。」

「大丈夫だ、いるって・・・たぶん・・・おそらく・・・」

「だんだんと自信がなくなってきてんぞ。」

「う・・・うるさいなあ。」

しかし・・・この学校にあいつらがきて、『お弁当ですよ』といったら、あいつらが帰った瞬間に男子共に飛び掛られ引きちぎられるな・・・どうする。

「口にでてんぞ・・・っつかマジでいるの？」

俺はコクリとうなづく。

「この学校の男子は飢えているからな。」

「お前はどんなんだよ。」

「・・・俺は・・・言っただろ。」

「ショタコンの知らない女性に連れて行かれそうになったせいで、知らない女性に異常なほどの恐怖心を持ち出した子供時代♪。」

そう、こいつには女性に関してトラウマがある。ゆえに俺が紹介した百合子や、こいつのいところ、そして昔から一緒にいた家がとなりな女の子ぐらいしか縁がない、イケメンは殺したいぐらい憎いが、

こいつにとっては哀れなものである。「付き合ってください」といわれてもビクビクしながら「い・・・いや無理です。」というのである。

「そして、そのとなりの女の子は現在中学一年。いま付き合ったらロリコンである。うわーキモーイ！」

「いってんぞ。おいこら。」

とかいってると、俺の名前を呼ぶ声がある。

「稟、お弁当をもってきてあげました。」

「・・・」

「稟？」

ギギギ・・・ツと相手の方向に顔をむける。

理解してくれ。この言葉で。『全員集合』（吉野姉妹以外）

「・・・へえ。」

軽蔑した目を向ける健二、目が痛い、でもこれ事実・・・。

「彼女とかじゃないからな、同居人だからな。」

「同棲か、ふーん。」

「さてよ、まってくれよ、俺はこいつらのことを愛してもいない。」

「そうか、一方的に押しかけられたか！」

「ちが・・・違うない・・・でもなんだろう、これ・・・言い返せない。」

「稟・・・がんばれよ。」

いつのまにか集団が真横にいる。

「・・・はい、こんにちは。」

「学校というものが気になりましたね。いくといたら全員ついてきました。」

咲がそういう、全力でとめてくれよ。

「では、これが弁当ですね。」

「はい、ありがとうございます。」

「では、家で、待ってますから。」

「はい、わかりました。」

彼女らは帰っていった。俺は心の中で南無阿弥陀仏と唱える。だがいつまでたっても襲撃はこない。

・・・何故だ？と思って顔をあげると。

「・・・増えてた・・・ね。」

修羅ごとくな顔をした百合子が居た。

G
A
M
E

O
V
E
R

第三十八話『学校より・・・神が行く』後編

ひどい目にあった。

百合子の弾丸にも思える速度で出てくるパンチに、最初は俺は避けていた。

だが、まだ戦いなれているわけではないのか、足をすくわれ、体勢を崩された後、肝臓を狙って一撃を喰らった。

ぐぼおおっ、という変な声をあげて、俺はふっとんでいく。

倒れ伏せた俺をみて、百合子は一言・・・

「ふう、本気でやれるっていいことだね。」

教室が静まり返った。

——放課後になる。

百合子はボクシング部があるとかでバイバーイとかいいながら部屋へいった。

そして今は健二と一緒に帰っている。

ついでに、健二は手芸部・・・似合わないと思う。

「そして裁縫がめちゃくちゃ上手いという奇人的能力を持ち合わせた不良少年がこのかたである。」

「ダレが奇人だ。」

「お前。」

「容赦ないなお前・・・」

そんなこんなで今は帰り道。

チンピラA、B、Cが現れた！

唐突であった。

「・・・」

「・・・お前というと毎回チンピラに絡まれるのは何故だい？」

「・・・しらん。」

「おいてめえ！前はよくもやってくれ」「フェロモンでも発しているのか？蜜の香りか。」

「ああ！？何無視してくr「俺は花か。チンピラは一匹倒したら30匹はでてきやがる。」

「てめえ「ゴキブリ並つてのはわかるけどよ・・・そのいいぐさはないよ。」

「話をきけつつつて「ああーまあ同じ人間・・・かなあ？」

「てめ「かなあつて・・・うん、まあ俺も言つててわからなくなつてきた。」

「「「・・・」」」

チンピラが泣きそうだ！

「話を聞いてくれませんか？」

チンピラAが丁寧だ！

「いいですよ？」

「ああ、いいぜ。」

「わざとか？わざとなんだろ？」

「YesかNoか・・・その二択で迫られたなら・・・Yesだ。」

「ざけんじゃねえよ！てめえら・・・俺を怒らせたらどうなるかわかつてんだろうなあ？ああ？」

チンピラはナイフを取り出した！

攻撃力は10ポイントアップした！

「・・・やってやろうじゃねえか」

健二は構えた！

「やってやろうじゃねえか！On！」

稟は刀を装備した！

攻撃力が150ポイントアップした！

「・・・・・・・・」

すべての人間が沈黙した。

「え・・・えっと・・・本物ですか？」

「本物ですけど？」

チンピラが凍りついた！

「なあ、ほかに武器ないのか？」

健二に大剣を渡した！

攻撃力は230ポイントアップした！

「・・・えっと・・・ごめんなさい?」

戦いは終了した。

稟は健二に大剣をあげた。

チンピラは帰っていった。

稟と健二は帰っていった。

茶番だと思った。

第三十九話『神は家計など関係無しに』

帰り道、スーパーへ向かおうとすると携帯が震える。

「……？ 咲……って書いてあるけど、あいつ携帯なんてもってたかな？」

携帯を開き、メモリーを調べてみるが、そこには咲の文字がない。

俺の記録には43件ぐらいしか入ってないので、速攻分かることだ。見逃すはずもない。

「……もしかして、天使の力とかいうんじゃないだろうな？」

『咲

天使の力です。』

「……そうかよ。」

もう一度震えるので再度みると、再度咲から。

『咲

天使が増えそうです。』

「……家計が！家計があああっ！一ヶ月なら大丈夫かと思ったけど、家計がもうヤバイんだよ！」

エリサにルベリア、咲に瑠璃、妹に姉、そして最近入ったルリカ・
・そして俺。

そしてサラに増えるわ、もう一人。

9人だあ☆家計とか全く考えてないよ糞親父☆

「うおおおお！やめて！俺のサイフはもう0だあああっ！」

泣いていいかな？泣いていいよね？この金と言う家内の財政問題に
当たった俺の運命どうよ？まさに今の国家の財政問題よりも苦しい、
そしてたぶん一週間でこれなら終わりには20人は越えているだろ
う。

「なんっじゃこりゃあああああ！」

通る人が俺を中心に円を描くように避けていつているけど気にしな
い、しょっぱい心の汗が眼から出て行っているこの状況にくらべて
そんなものでもいいんだYO！

って頭を抱えていると、さらに下があることを発見する。

『P・S・満漢全席は可能ですか？』

不可能です

「そもそもお前らは俺に何を求めているのだ？飯か？飯だろ？

神とかお前ら考えてんのかコラアツ神に飯をつくらせて、のんびりしているやつなんて聞いたこともないぞこんッ畜生

どんな天使だ！どんな天使だッ！？俺の一ヶ月間はなにか？親父の『ハーレム1000人できるかな計画』によりつぶされるのか？ふざけんじゃないってんだよオイ！

ああもう！種馬じゃねえんだから無理だっつつてんだろ！？俺にそんなキャパシティはねえよ！

俺のすべてをどう思っただの糞野郎は行動してんだ？全くわかんねえよ！？燃やすぞ？永遠に？

俺が神になりゝ革命しゝ母を助けゝそして・・・父親を燃やそうと俺の心にきざみつけるぞボケ！

ああ！もう！家計の悪化で親父を火刑に処してやる！ぜってえ燃やす！髭生やしてたら髭から燃やす！

髭に着火して暴れまわる様を見てやるぞ！JOJOオオオオ！」

何をいつているんだかさっぱりだが、家出とか、居座っているやつらに帰れとは言わないお人よしな性分が彼であった。

・・・お人よし？

P・S・

「そういえば・・・天使の力って本当か咲？携帯にメールがきたんだが。」

「事実です、信念を飛ばしています。いわば携帯にねじ込みます。」

「・・・ねじ込むって・・・どんな感じだがさっぱりなんだが。」

「え・・・えーっと・・・キ・・・キラツ☆っ・・・て感じ」

「カワイイ・・・とは思うけど・・・俺に反応する気力がないよ。」

第三十九話『神は家計など関係無しに』（後書き）

作者の暴走が最近激しいのですが、どうすればいいんでしょうか。

「自分で自重しろ。」

ですよー

第四十話 『さらに増えるか、チクショウ。』 (前書き)

パソコン壊れた。

いま他のパソコン使っているんですが、次は異様なほどおくれると思います

第四十話『さらに増えるか、チクショウ。』

ユサユサ

「・・・朝・・・？」

朝日が差し込む・・・ことはない。

部屋も暗い。だが俺の体をゆらしているものがある。

「・・・」

無言で近くの時計をとり、みる。

『3..20』

「・・・真夜中じゃねーか。」

「起きましたか？」

「いや、起きるにはまだ早いだろ。」

「起きましたか？」

「いや、だから起きるには・・・」

「起きましたか？」

「起きるまでやるの？」

「起きましたか？」

「いや、わかった・・・」

「起きましたか？」

「はい、うん・・・」

諦めた。まっすぐ前をみると、メイド服をきた人が居る。

「では、自己紹介えす・・・です。」

「噛んだ？」

「噛んでません」

「噛んだよね？」

「噛んでません。」

ええい、このままじゃ終わらない。

「んで、キミは？」

「にやにを・・・なにを、私の自己紹介を中断しちゃ・・・したのはあなたです。」

かみまくりである。

「ルカと申します。」

「はい、俺は吉野稟だよ。」

「はい、よろしくお願いします。」

「じゃ・・・ZZZ・・・」

「・・・」

ピキッという音がした。

そして・・・

「ぐふおお!？」

爆音をならし、部屋が吹っ飛ぶ。

「な・・・なにごとお!？」

姉と妹が俺の部屋へと現れる。

いや、オレもびっくりである。

「ああ・・・調子くれてんじゃねえよ・・・」

そこには、修羅のようなルカがいた。

彼女は『二重人格』であると、その後天使&女神にいわれるのであった。

第四十話 『さらに増えるか、チクシヨウ。』 (後書き)

・・・書きにくいので、さっさと終わらせた。

このパソコンだと何故かこっちは書きにくい。

まあ、次は頑張って書きますね。

第四十一話『金の問題は速やかに対処する。』
(前書き)

パソコン、すぐに直ったことを報告します。
危なかった・・・。

第四十一話『金の問題は速やかに対処する。』

「さて、9人目ですね。」

俺はペタペタと絆創膏を顔に張りながら告げる。

朝、俺の部屋は半壊したためソファ―にねた。・・・そのため体がすこし痛い。

「・・・多すぎるんじゃないかな？」

そう告げてみると、案の定天使はそっぽをむき、吉野姉妹は、「まあたしかに」といった感じだ。

正直、考えても見ると9人とかどんな家族だと思う。

しかもあれだ、8人女性。稟は思う、『俺についての評判がさらに墜落する』と。

正直評判などあるものかと思われる。

大抵の近所の吉野家は『両親がちょっとおかしく』『子供はまだマシ』といった評価だ。

両親の評判がある上、『マシ』という評価は結構広範囲なので別に評価はかわらないと思われる。

「で・・・一ヶ月だけどさ、・・・たぶん食費たらないんじゃない

かな？」

そもそも俺のバーゲンセール苦勞がある。

毎日苦勞して買ってきているのだが、この人数じゃあその苦勞さえイミガナイ。

「稟」

咲がすこしよってくる。

「なんだ？」

「あなたの貯金通帳を全額つかいましょう。」

「・・・」

こいつら、俺をなんだと思っているんだ。

「まあいざとなったらやるけどさ。」

「「やるの!?! 神だよね!?!」」

姉さんと才がなにかいっている気がするが、背に腹はかえられないのである。

「泣いていい? 泣いていいよね?」

「男はなくなよ。苦境を乗り越えてこそ真の男・・・いや漢だ。」

「ガ
ツ
ツ
です。
」

ルベリアさん、エリサさん・・・。

「でも君たちが一番食べてるよね？」

眼をそらされた。

「神の世界に帰るといふ選択肢をもつもの手をあげてっ！」

•

•

•

[illegible]

外の車の音が良く聞こえるなあ

「・・・君たち・・・咲と瑠璃はわかるし、ルリカも俺が呼び出したんだから責任持つし、ルカ自体はなんできたのか分からない状態だけど、ルベリアさん女神だよね？エリサさんその天使。」

「ふ・・・お前を強くする使命がある。」

「で、本音は？」

「飯が上手い、帰りたくない。」

「それが本音か!？」

飯をたかる戦女神なんて聞いたことない！というか神が人の目の前にくることも聞いたことがないんだけどさ。

「・・・さて、どうするか。」

必死で考える。

最終的に俺がすこしでも楽しめるように俺の貯金通帳は死守したい。

だが、背に腹は変えられない（二度目）

「うおおおおおお！ダレカ助けろよおおおおおお！」

そんな遠吠えが家で響く。

「あのー」

「ダレッ！？」

「ひいっ！？りゅ．．．りゅかです。」

「PKファイヤー！？」

「い．．．いやルカです。」

俺に向かって手をあげるのはルカであった。

「というか何故俺のところ？」

「私はいれです。お金を渡しに来ました．．．あと家族の一員と
なっておけということです．．．邪魔ですか？」

「いや、全然、うれしいよ？とりあえずありがとう。」

そういつて俺は封筒を渡される。中には数十万がはいっていた。

「．．．シビアだな。」

「神なんだから何百万も渡せって感じですが、さすがに日本の金融
に影響を与えるわけにはいかないでしょう。」

まあたしかにそうなんだが。

天使が始めて役に立った気がすることに気づき、なんだか複雑な稟
であったという。

第四十二話『風邪とルベリアと三国志』（前書き）

もう一つにも書いたとおりに、次は一週間後となるわけで。

ぶっちゃけていうとね、久しぶりに書いて感じたんだよ。

ネタ・・・おもいつかないなあって。

第四十二話『風邪とルベリアと三国志』

暇だったから、昔のゲームをひっぱりだしてみた今日この頃。

なんだか早く起こされ、部屋をふつとばされ・・・人数が増え。

家計の緊迫を逃れた安堵感から、何故かわからないけど熱が出た。

なんていうのだろう、サッカーの大会があったとき、緊迫した空気が張り詰め続け。

終わった後にそれが解かれ、一時的な疲労を覚える感じが今の感じである。

「・・・ふう・・・」

風邪になり、稟はヤレヤレと思う。

飯をつくれるものなどいるのか、ちょっと不安な状況だが、朝飯はなんとか作り終わり、ゼイゼイいいながら稟は学校へと電話をよこし、ベットへと横になる。

「・・・うー」

昼飯ぐらいなら抜いても大丈夫だろう。天使姉妹には冷凍食品で我慢していただきたい。

天使・・・思いつきり従者である稟に対し、完全に立場などどうで

もよさげな二人だが、さすがに風邪のとき無理矢理働かせる真似はしないだろう。

というか、そもそも風邪じゃなくても働かせないでほしいんだけど。

「・・・まあいまさらだ。」

稟はベッドへと入り・・・

――十分後――

眠れなかった。

「・・・うう・・・」

なんだか嫌になる。気を紛らわすにはなにかやろうか？

と思い三国志のゲームを出したものであった。

これは、戦闘シュミレーションのようなものだ。

三国無双のように、一人の武将で殺しまくる感じのゲームではなく、ちゃんと軍を動かして戦う。

「さて・・・」おお稟、なんだか面白そうなものをやっているんだな？」ルベリア・・・」

「さて私も」

「それじゃあ稟、はいりますよ。」

「うん、神様ー」

そういつてルベリアとエリサが入ってくる。それに続いて咲と瑠璃までも。

なんだこいつら、俺の安静な状況を（ゲームしてたけど）邪魔してきやがったのか？

とか稟が、『いまさらなにを』なことを思っていると、ルベリアはディスクをみる。

「これはなんだ？」

「ゲームのディスクだよ・・・っと、ほい・・・」

ガーとかいいながらディスクをセットするところがでてくるので、それに乗せてもどす。

そうすると読み込んでゲームが起動する。

それを見て、ルベリアは「おお！？」という新鮮な反応をみせてくれた。

「すごいぞ！これは！なんか始まっている！」

テレビは驚かないのにゲームに驚くというのもなんなのだろうと稟は思った。

とりあえず始める。

「んで・・・ルベリアやってみるか？」

「いいのか！？」

ルベリアのワクワクといった状態に、なんかかわええ・・・とか思
いながらコントローラーを渡し一通りのことは教える。

そこで、なんだか眠気が出てきた。ちょっと安心したといった感じ
だろうか。

「稟・・・寝ますか？」

「ああ・・・静かにしてくれればそれでいいから、楽しんでくれ。」

俺はそういつて、ベットへと入り眠っていく。

つぎに起きたとき、三国志の世界は

ルベリアが使用している軍により勝利を重ねていた。

「・・・さすが戦女神」

蜀視点で今現在はプレイ中。

雲長さんの死亡など無視して、敵をボッコボッコにしている様子は
なんだかシュールであった。

「フハハハ！弱い！弱いぞ！おぬしらわれを誰と心得おる！われは
戦女神、ルベリア様ぞ！」

なんだか知らないが、大丈夫だろうかルベリアは。

咲と瑠璃は俺のベッドに寄りかかって寝ている。

エリサはいつしよになってフィーバー。

はつきりいつてすごいさうさ。

「うう・・・」

次の日はさらに熱が出たということをごここに書いておこうと
思う。

第四十二話『風邪とルベリアと三国志』（後書き）

やっつけだよ・・・ネタがなくなつてさ。

まあ・・・一週間後までなんとかしておこう。

第四十三話『風邪とルベリア。』（前書き）

ネタが全くない。

ダメだ・・・もう一方のネタが浮かびすぎていてこれが進まない・・・

とりあえずほのぼのとしてみたかったから書いた。

第四十三話『風邪とルベリア。』

沈黙が、室内へ充満していた。

ベットで死にそうにしているのは、今作主人公『吉野 稟』

気まずそうにしているのは戦女神『ルベリア』

「すまん・・・」

「いや・・・いゲフウツゴホツガハツひゅーひゅー・・・いいって
べっげへっ」

死にそうに席をし続ける稟は、本当に死にそうであった。

それもこれも前回の『ルベリアに三国志』をやらせたところ。

ヒヤッハーと、某雑魚モヒカンのようなテンションで暴れ始めた。

その結果、逆に熱があがったのであった。

「うう・・・さすがに今日は静かにする。すまない、本当にすまない・・・」

今現在の稟の熱は『40.1』むしろ病院いけ、といたいところだが、車がない。

救急車を呼びたいところだが、ルベリアには電話の使い方がわから

ない。

というか、筋力が強すぎて、盛っただけでメキツという音が流れてしまい、明にさわらせてもらえなかった。

「・・・とりあえず薬、ってもうないな。」

その言葉をきいたルベリアが立ち上がり、部屋を飛び出していく。

そのルベリアの服をつかみ、稟は無理矢理ルベリアを止める。

・・・筋力の違いのせいで、ドアに頭を打ち付けてしまった。

「いっつ・・・別にいいから。」

頭をおさえている稟に、ルベリアは「すまない」と誤り、もとの位置へと運ぶ。

お姫様抱っこで。

思わず赤面した稟であった。

「・・・とりあえず、まあ俺は気にしてないから、とりあえず寝かせてくれ。」

「うう・・・わかった。」

そういつて、ルベリアは稟の机の椅子へと座る。

「だがな、さすがに私のせいだ・・・近くでみていいいか？」

「風邪、うつつてもしらないぞ？」

「かまわない、私は戦女神だぞ？兵が戦で風邪をひくなどたまったものではないじゃないか。」

「・・・それならいいけれど。」

そういつて俺はゆっくりと意識を落としていった。

結果からいうと、すぐに風邪は治った。

意識が覚醒したとき、ルベリアは俺のベットにもたれながら眠って

いた。

「大丈夫なのか・・・？」

俺が起きたことに気がつき、ルベリアは声をかけてくる。

寝ている間に、何人かが足を運んでいたことを聞いた。

『家族』に俺はとても感謝して。

それでとても・・・うれしかった。

その後、夕食にて、ルベリアが「また三国志やっていいか？」といったことに。

苦笑いをしたのはいい思い出である。

第四十四話『久しぶりすぎてキャラがつかめません』（前書き）

やること終えたので、まあやってやろうとオリ主原作破壊小説を書いてみたけど、まったくかいて面白くないんですけど、どうしましょ。

第四十四話『久しぶりすぎてキャラがつかめません』

「・・・作者の本音が聞こえた。」

「何をいつているのですか、稟は、異次元のボケはやめてくださるとうれしいです。」

咲がそうツツコンでくるが、聞こえてしまったのだから仕方がない。

「そもそも作者は曜日を考えてない時点でダメだろう。」

「日数もいまさらに微妙ですからね。」

「ダメだな。」

「稟くらいダメです。」

「え・・・ええ!?!?なんでそこ俺がくるの!?!?」

学校の日――

風邪で休んだ後の学校というものは憂鬱だ。正直言ってまだ風邪があるってことで休みたい気分になるのは普通でしょう。いきたくていきたくてたまらなかった、それも普通でしょう。

だけど俺は家にいたくないので学校にいきます。

「・・・本当に大丈夫なの？ 稟」

風邪が終わったあとの家族というものは優しいものだ。こういって心遣いがすばらしく泣けてくる。日常に全くないといったところに今の俺の家の構成は、正直いって世の一般男性では『ハーレムじゃねーか！』とかいいながらナイフをもって暗い夜道にストーカーされるほどいいところなのだろう。

だけど考えてみてくれ。

『咲』 毒舌ニート天使

『瑠璃』 腹黒天使

『ルベリア』 何この化け物

『エリサ』 戦闘狂

『ルカ』 二重人格

ろくな奴らが居ないといってやろう。

至福は家族のみ。

クールな妹と元気な姉。

「本当に家族は最高だ。」

「ボロボロと泣きながらボソボソと何かをいわないでください。稟、気持ち悪いです。」

咲ってば容赦ないよね、本当に

納豆を手に取り、とりあえず俺は考えておく。

「順番的に最初はしょうゆが普通なのだろうが、順番で味の変化があるかもしれない。変更すべきか？かき混ぜる数も正直考えたほうがいい。数によって上手さが変わる。納豆というものは正直ねばねばしているところに味というものがつきやすいわけだから、豆と共にスルツとはいっていくというものが最高だ。そのためには数というものは考えなければいけない。いや、最後にしょうゆだけいれてなじむ程度のほうがいいのだろうか？かき混ぜて均等にするよりも、有る程度の濃い部分と薄い部分がうまみになるのではないか？いや、考えろ俺考えるんだ。」

「・・・正直一番おかしいのは・・・」

「いうな、才。」

「でも・・・」

「男ってもんにはあ、いっていいこととお、悪いことがあるってもんだよお。」

「なんかキャラ違うない？」

「それは仕方がないってことなんだよ。」

吉野姉妹がなにかをいっているが反応はしないで置こう。

さて飯も食べ終わったわけで、俺は学校へ行こうと立ち上がる。

「さて、皆、俺のために洗っておくか、鬼畜ごとき俺への疲労蓄積のために水につけておくかどっちかにしてくれないか？」

「じゃーつけておく」

「洗いたくない。」

「つけておきますね。」

「がんばってねー！」

「とりあえず水につけておこう。」

「つけておきます〜」

「つけておくよ♪」

いや、うん、わかってたけどね、あれ？眼から何かでてきたよ？

— I N 学校

「・・・俺の家族は手伝うという選択肢がない。」

「いや、知らないよ、いや泣くなよ。血の涙を流すなよ」

「百合子、お願いだ、一緒に考えてくれ。あいつらに俺としての威厳を伝わらせるために。」

そういうと、百合子は何かを思案するかのように考えはじめる。お、こいつは俺のために考えてくれるのか・・・という涙がうれし涙がでてくる。

百合子は考え終わったのか、渋い顔をしている。考え付かなかったのだろうか、いやはや、考えてくれるだけでも最高の友といえるものだ。百合子へ好感度がぐんぐん上がっている。

「なあ・・・」

「ん？ どうしたの？」

百合子が聞いてくる。考え付かなかったにしても有る程度の案はでてきたのだろうか？

「君に・・・威厳なんて会ったのか・・・？」

時が止まった気がした

「バカアアア！」

「ちょ稟——！」

涙を流しながら逃走劇を繰り広げることとなった。

第四十四話『久しぶりすぎてキャラがつかめません』（後書き）

・・・主人公が、主人公の親友的位置のキャラになってる気がする

こんな感じでしたっけ？三ヶ月ぶりって、怖いね☆

次にやるのも三ヶ月後です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080j/>

神への一ヶ月～俺の周りはくるってやがる～

2010年10月15日22時48分発行